

活人形

泉鏡花作

一 急病

雲の峰は崩れて遠山の麓に靄薄く、見ゆる限りの野も山も海も夕陽の茜に染みて、遠近の森の梢に並ぶ夥多寺院の薨は眩く輝きぬ。處は相州東鎌倉雪の下村番地の家は、昔何某とかやいへりし大名邸の舊跡なるを、今は赤城得三が住家とせり。

門札を見て、「フム此家だな。」と門前に佇みたるは、倉瀬泰助といふ當時屈指の探偵なり。色白く眼清しく、左の頬に三日月形の古創あり。こは去年の春有名なる大捕物をせし折、鋭き小刀にて傷けられし名残なり。探偵の身にしては、賞牌ともいひつべき名譽の創痕なれど、衆に知らるゝ目標となりて、職務上不便を感ずること尠からざる由を啣てども、巧なる化粧にて塗抹すを常とせり。

倉瀬は鋭き眼にて、ずらりと此家を見廻し、

「はゝあ、これは大分古い建物だ。宛然描に書いた相馬の古御所といふ奴だ。なるほど不思議がありさうだ。今に見ろ、一番正體を現して遣るから。と何やら意味ありげに呟きけり。

さて泰助が東京より此鎌倉に來りたるは、左の如き仔細のありてなり。

今朝東京なる本郷病院へ、呼吸も絶々に駈込みて、玄關に着くとそのまゝ、打倒れて絶息したる男あり。年は二十三にして、扮装は好からず、容貌太く憔悴たり。検死の醫師の診察せるに、こは全く病氣の爲に死したるにあらで、何にかあるらむ劇しき毒に中りたるなりとありけるにぞ、棄置き難しと警官が不取敢招寄せたる探偵はこの泰助なり。

泰助はまづ卒倒者の身體を検して、袂の中より一葉の寫眞を探り出だしぬ。手に取り見れば、年の頃二十歳ばかりなる美麗き婦人の半身像にて、其愛々しき口許は、寫眞ながら言葉を出ださむばかりなり。泰助は莞爾として打領き、「犯罪の原因と探偵の

秘密は婦人だといふ格言がある、何、譯はありませ
ん。近い内に屹度罪人を出しませう。と事も無
げに謂ふ顔を警部は見遣りて、「君、鯁でも食つ
て死によつたのかも知れんが。何も毒殺されたとい
ふ證據は無いではないか。泰助は死骸の顔を指
さして、「御覽なさい。人品が好くつて、瘦つ
こけて、心配のありさうな、身分のある人が落魄た
らしい、かういふ顔色の男には、得て奇妙な履歴が
あるものです。と謂ひつゝ手にせる寫眞を打返し
て、頻りに視めて居たりけり。先刻より死骸の胸
に手を載せて、一心に容體を伺ひ居たる醫師は、此
時人々を見返りて、「何やら幽に脈が通ふ様です。
此方の者になるかも知れません。静にして置かな
ければ不可せんから、貴下方は他室へお引取下さい。
警部は巡査を引連れて、靜に此室を立去りぬ。

泰助は一人残りて、死人の呼吸を吹返さむとする
間際には、秘密を唸り出す事もやあらむと待構ふれ
ば、醫師の見込みは過たず、良ありて死骸は少しづつ
の呼吸を始め、やがて幽に眼を開き、絲よりも尚細
く、「あゝ、此が現世の見納かなあ。得たりと

醫師は膝立直して、水薬を猪口に移し、「さあ此をお飲みなさい。と病人の口の端に持行けば、面を背けて飲まむとせず。手を以て力無げに振拂ひ、「汝、毒薬だな。と眼は瞠りぬ。之を聞きたる泰助は、「來たな」と腹に思ふなるべし。

醫師は聲を和げて、「毒ぢや無い、私は醫師です。早くお飲みなさい。といふ顔を先づ屹と視て、やがて四邊を見廻しつ、泰助に眼を注ぎて、「彼は誰方。泰助は近く寄りて、「探偵吏です。

「え、と病人は力を得たる風情にて、「而して御姓名は。「僕は倉瀬泰助。と名乗るを聞きて病人は嬉しげに倉瀬の手を握り、「貴下が、貴下があの名高い……倉瀬様。あゝ嬉しや、わたしは本望が協つた。貴下に逢へば死んでも可い。と握りたる手に力を籠めぬ。何やらむ仔細あるべしと、泰助は深切に、「其は何ういふ次第だね。

「はい、お聞き下さいまし、と言はむとするを醫師は制して、「物を言つたり、配慮をしては、身體の爲に好く無い。と諭せども病人は頭を掉りて、「悪僕、八藏奴に毒を飲まされましたから、

私は何しても助りません。「何、八藏が毒を。
・・・・と詰寄る泰助の袂を曳きて、醫師は不
興氣に、「これさ、物を言はしちや悪いといふの
に。「僕は探偵の職掌だ。問はなければ
ならない。「私は醫師の義務だから、止めなけ
ればなりません。と争へば病人は、「ご深切は
有難う存じますが、到底私は助りませんのですから、
何卒思つてることを言はして下さいまし。明日ま
で生延びて言はずに死ぬよりは、今お話し申して此
處で死ぬ方が勝手にございます。と思ひ詰めては
なか／＼に、動くべくも見えざりければ、探偵は醫
師に向ひて、「是非が無い。あゝいふのですか
ら、病人の意にお任せなさい。病人はまた、
「而して他の人に聞かしたうございませぬから、恐
入りますが先生は何卒彼地へ・・・・。
とありければ、醫師は本意無げに室の外に立出でけ
り。

二 系圖

病人は苦痛を忍びて語り出だしぬ。

我は小田原の生にて本間次三郎といふ者。幼少

の折父母を失ひければ、鎌倉なる赤城家に嫁ぎたる

叔母の許にて養はれぬ。假の叔父なる赤城の主人

は大酒のために身を損ひて、其後病死したりしかば、

一族同姓の得三といへるが、家事萬端の後見せり。

叔母に下枝、藤とて美しき二人の娘あり。我と

は従兄妹同士にていづれも年紀は我より少し。多

くの腰元に齊眉かれて、荒き風にも當らぬ花なり。

我は食客の身なれども、叔母の光を身に受けて何不

自由無く暮せしに、叔母はさる頃病氣に懸り、一時

に吐血して其夕、敢なく逝りぬ。今より想へば得

三が毒殺なせしものなるべし。さる悪人とは其頃

には少しも思ひ懸けざりき。

去れば巨萬の財産を擧げて娘の所有となし、姉の

下枝に我を娶はせ後日家を譲るやう、叔母はくれ／＼

遺言せしが、我等の年紀の少かりければ、得三は

舊もとのまゝ一家いっけを支配しはいして、己おのが隨意まゝにぞ振舞ふるまひける。

叔母おやめ死しして七々日ななぬかの忌いみも果はてざるに、得三とくは忠實ちうげの假面かめんを脱ぬぎて、やうやく虎狼こらうの本性ほんしやうを顯あらしたり。

入用いらさる雑用ざふようを省はぶくと唱となへ、八藏やうざうといへる惡僕あくぼく一人ひとりを留とめ置おきて、其餘そのよの奴僕ぬぼくは盡ことゝく暇ひまを取とらせ、素性すじやうも知しられざる一人ひとりの老婆らうばを、飯炊めしたきとして雇やとひ入れつ。こは後あとより追々おひ／＼に爲出しださむずる惡計わるたくみの、人ひとに知られむことを恐おそれしなりけり。昨日きのふの榮華えいぐわに引替ひきかへて娘むすめは明暮あくれ不幸ふかうを啣かこち、我われも手酷てひどく追役おひつかはるゝ、勞らう苦くを忍しのびて末々すゑ／＼を樂たのしみ、偶會たま／＼下枝しげえと媾あひゞき曳ひして纒わづかに慰なぐさめ合あひつ、果はては二人ふたりの中なかをもせきて、顔かほを見るみさへ許ゆるさゞれば垂籠たれこめたる室まの内に、下枝しげえの泣なく聲聞こゑきく毎たひに我われは腸はらわたを斷たつばかりなりし。

數かずふれば三年前ねんぜん、一日あるひ黄昏たそがれの暗紛くらまぎれ、潛ひそかに下枝しげえに密會しのひあひ、様子ようすを聞きけば得三とくは、四十よじを越こしたる年としにも恥はぢず、下枝しげえを捉とらへて妻つまにせむ。我心わがこころに従したがへと脅迫けうはくすれど、聞入きゝいれざるを憤いきどほり、日に日に手暴てあらき折檻せつかんに、無慙むざんや身内みうちの皮かはは裂きけ、血ちに染そみて、紫むらさ色きいろに腫はれたる痕きずも多おほかりけり。

下枝は我に取継りて、得堪へぬ苦痛を訴へつゝ、
助けてよ、と歎くになむ。さらば財産も何かせむ。
家邸も何かせむ、皆得三に投與へて、斯る悪魔の火
宅を遁れ、片田舎にて氣散じに住み給ふ氣は無きか、
連れて遁げむと勧めしかど、否、先祖より傳はりた
る財産は、國とも城ともいふべきもの、いかに君と
添ひ度いとて、人手には渡されず。今得三は國の
仇、城を二十重に圍まれたれば、責殺されむ其まで
も、家は出でずに守るといふ。男勝りの心に恥ぢ
て、強ひても言ひ難く、さればとて此まゝにては
得三の手に死ぬばかりぞ、と抱き合ひつゝ泣き居た
りしを、得三に認められぬ。言語道斷の淫戯者片
時も家に置難しと追出されむとしたりし時、下枝が
記念に見給へとて、我に與へし寫眞あり。我は彼
悪僕に追立られて詮方無く、其夜赤城の家を出で、
指して行方もあらざれば其日其日の風次第、寄る邊
定めぬ捨小船、津や浦に彷徨うて、身に知る業の無
かりしかば、三年越しの流浪にて、乞食の境遇にも、
忘れ難きは赤城の娘、姉妹とも嘸得三に、憂い愁い
目を見るならむ。助くる術は無きことか、と頼母
しき人々に、一つ談話にするなれど、聞くもの誰も

信とせず。思ひ詰めて警察へ訴へ出でし事もあれど、狂気の沙汰とて取上げられず。力無く生甲斐無く、漣や滋賀縣に侘年月を過すうち、聞く東京に倉瀬とて、弱きを助くる探偵ありと、雲間に高きお姓名の、雁の便に聞ゆるにぞ、さらば助を乞ひ申して、下枝等を救はむと、行李忽々彼地を旅立ち、一昨日此地に着きました、暑氣に中りて昨日一日、旅店に病みて枕もあがらず。今朝はちと快氣なるに、警察を尋ねて見ばやと、宿を出づれば後より一人跟け来る男あり。忘れもせぬ其奴こそ、得三に使はるゝ八藏といふ悪僕なれば、害心もあらむかと、用心に用心して、此病院の裏手まで来りしに、思へば運の盡なりけむ。俄に劇しく腹の痛みて、立つても居られず大地に僵れ、苦しんで居る處へ誰やらむ水を持来りて、吞まして呉るゝ者あり。眼も眩み夢中にて唯一呼吸に吞干しつ、稍人心地になりたれば、介抱せし人を見るに、別人ならぬ悪僕なり。はつと思ふに毒や利きけむ、心身忽ち悩亂して、腸絞る苦しさにさては毒をば飲まされたり。彼の探偵に逢ふまでは、束の間欲しき玉の緒を、繋ぎ止めたや／＼と絶入る心を激まして、幸ひ此處が病

院いんなれば、一心しんに駈かけ込みし。
呼い吸きつきあへず物語ものがたりぬ。

其後そのあとは存ぞんぜずと、

三 一寸手懸

泰助は目をしばたゝき、「薄命な御方だ、御心配なさるな。請合つて屹度助けて進げます。と眞實面に顯るれば、病人は張詰めたる氣も弛みて、がつくりと弱り行きしが、頻に袂を指さすにぞ、泰助は耳に口、「何です、え、何ぞあるのですか。」「下枝の寫眞。」「むゝ、其は此でせう。先刻僕が取出しました。と彼の寫眞を病人の眼前に翳せば、熟々と打視め、「私と同じ様に、嘸今では憔悴て、とほろりと涙を泛べつゝ、「此面影はありますまいよ。死顔でも見たい、もう一度逢ひたい。と現心にいひければ、察し遣りて泰助が、彼の心を激まさんと、「氣を丈夫に持つて養生して、ね、翌朝まで眼を塞がずに僕が下枝を連れて來るのを御覧なさい。今夜中に助け出して、財産も他手に渡さないから、必ず御案じなさるな。と言語を盡して慰むれば、頷くやうに眼を閉ぢぬ。

折から外より戸を叩きて、「もう開けましても差支へございませんか。と醫師の尋ぬるに泰助は

振りかえ
「宜しい、おはひんなさい。と答ふ
れば、戸を排きて、醫師とゝもに、見も知らぬ男入
り来り。此男は、扮装、風俗、田舎漢と見えた
るが、日向眩ゆき眼色にて、上眼づかひにきよろつ
く様、不良ぬ輩と思はれたり。

泰助屹と眼を着けて、「お前様は何しに來たの
だ。問はれて醜顔き嚴丈男の聲ばかり惡優しく。
「へい／＼、お邪魔様申します。些お見舞に罷
出たんで。「知己のお方かね。「いえ、唯
通懸つた者でがんですが其の方が強くお鹽梅の悪い様
子、お案じ申して、へい、故意。といふ聲耳に入
りたりけむ。其男を見て、病人は何か言ひたげに
唇を震はせしが、あはれ口も利けざりければ、指も
て其方を指示し、怒り狂ふ風情にて、重き枕を擡げ
しが、**＝**と倒れて絶入りけり。

今病人に指さゝれし時、件の男は蒼くなりて恐し
げに戦慄きたり。泰助などて見遁すべき。肚の
中に。ト思案して、「早く、お退きなさい。
お前方の入つて來る處ではありません。と極めつ

けられて悄氣かへり、「あゝ呼吸を引取ましたかい。可愛や／＼、袖振合ふも他生の縁とやら、お念佛申しましょ。と殊勝らしく眼を擦り赤めて徐ら病院を退出ぬ。泰助は醫師に向ひ、「下手人がしらばくれて、「死」をたしかめに來たものらしい。態と化されて、怪まぬやうに見せて、反對に化して遣つた。油斷するに相違無い。「いかさま怪しからん人體でした。あのまゝ見遁して置くお所存ですか、「なあに之から彼奴を突止めるのです。此病人は及ばぬまでも手當を厚くして下さい。誠に可哀相な者ですから。「何か面白い談話がありましたらう。「些少も愉快とは思ふのです。追々お談話申しませう。と帽子を取つて目深に被り、戸外へ出づれば彼男は、何方へ行きけむ影も無し。脱心たりと心急立ち、本郷の通へ駈け出で、東西を見渡せば、一町ばかり前に立ちて、日蔭を明神坂の方へ、急ぎ足に歩み行く後姿は其者なれば、遠く離れて見失はじと、裏長屋の近道を潜りて、間近く彼奴の後に出でつ。まづ是で可しと汗を容れて心靜かに後を跟けて、神

田小柳町のとある旅店へ、入りたるを突止めたり。

泰助も續いて入込み、突然帳場に坐りたる主人に向ひて、「今の御客は。」と問へば、訝かしげに泰助の顔を凝視しが、頬の三日月を見て慇懃に會釋して、二階を教へ、低聲にて、「三番室。」

四番室の内に忍びて、泰助は壁に耳、隣室の談話を聞けば、おのが跟けて來し男の外になほ一人の聲しけり。

「お前、御苦勞であつた。これで家へ歸つても枕を高くして寝られるといふものだ。」旦那も「歸國ますか。」此二人は主従と見えたり。

「如此して了へば東京に用事は無いのだ。今日の終汽車で歸國としようよ。」其が宜うございませう。而して御約束の御褒美は。「家へ行つてから與る。」間違ませんか。「大丈夫だ。」屹度でせうね。「え、執拗な。」
「有難え、と無法に大きな聲をするにぞ、主人は叱りて、「馬鹿め、人が聞かあ。後は何を囁く

か小聲にて些少聞えず。小時して一人其室を立出
で、泰助の潛みたる、四番室の前を通り行くを、戸
の隙間より覗き見るに、嚴格き紳士にて、年の頃は
四十八九、五十にもならむずらむ。色淺黒く、武
者鬚濃く、いかさま悪事は仕兼まじき人物にて、扮
装は絹布ぐるみ、時計の金鎖胸にきら／＼、赤城
といふは此者ならむと泰助は帳場に行きて、宿帳
を検すれば、明かに赤城得三とありけり。度胸の
据つた悪黨だ、と泰助は心に思ひつ。

四 宵にちらり

三時少し過ぎなれば、終汽車にはまだ時間あり。一度病院へ取つて返して、病人本間の様子を見舞ひ、身支度して出直さむと本郷に歸りけるに、早警官等は引取りつ。泰助は醫師に逢ひて、豫後の療治を頼み聞え、病室に行きて見るに、この不幸なる病人は氣息奄々として死したる如く、泰助の來れるをも知らざりけるが、時々、「赤城家の秘密……怨めしき得三……戀しき下枝、懐かしき妻、……あゝ見たい、逢ひたい、」と同じ言葉を幾度も謔言に謂ふを聞きて、よく／＼思ひ詰めたる物と見ゆ。遙々我を頼みて來し、其心さへ淺からぬに、蝦夷、松前はともかくも、箱根以東に其様なる怪物を棲せ置きては、我が職務の恥辱なり。いで夏の日の眠氣覺しに、泰助が片膚脱ぎて、惡人儕の毒手の裡より、下枝姉妹を救うて取らせむ。證據を探り得ての上ならでは、渠等を捕縛は成り難し。まづ鎌倉に立越えてと、やがて時刻になりしかば、終汽車に乗り込みて、日影やう／＼傾く頃、相州鎌倉に到着なし、滑川の邊なる

八橋樓に投宿して、他所ながら赤城の様子を聞くに、
「妖物屋敷、」 「不思議の家、」 或は 「幽霊
の棲家、」 など、怪しからぬ名を附して、誰あり
て知らざる者無し。

病人が雪の下なる家を出でしは、三年前の事とぞ
聞く。或は救助の遅くして、下枝等は得三の爲め
に既に殺されしにあらざるか、遠くもあらぬ東京に
住む身にて、かくまでの大事を知らず、今まで棄置
きたる不念さよ。もし下枝等の死したらむには、
悔いても及ばぬ一世の不覺、我三日月の名折なり。
少しも早く探索せむずと雪の下に赴きて、赤城家の
門前に佇みつゝ云々と呟きたるが、第一回の始まり
なり。此時赤城得三も泰助と同じ終汽車にて、
下男を従へて家に歸りつ。表二階にて下男を對
手に、晩酌を傾け居りしが、得三何心無く外を眺
め、門前に佇む泰助を、遠目に見附けて太く驚き、
「あッ、飛んだ奴が舞込んだ。と微酔も醒めて
蒼くなれば、下男は何事やらむと外を望み、泰助を
見ると齊しく反り返りて、「旦那々々、彼は先刻
病院に居た男だ。と聞いて益々蒼くなり、

「えゝ！ 其では何だな。 お前を疑ふ様な舉動があつたといふのは彼奴か。」「へい、左様でござい。 恐怖え眼をして我をじろりと見た。」「こりや飛んだ事になつて来た。 と一方ならず恐るゝ様子、」「何も左様、顔色を變へて恐怖がる事もありません。 病氣で苦しんでる處を介抱してやつたといへば其迄のことだ。」「でもお前が病院へ行つた時には、あの本間の青二歳が、まだ呼吸があつたといふでは無いか。」「ひく／＼動いて居ましたツけ。」「だから、二歳の口から當家の秘密を、いひつけたに違ひない。」「だつて何程のこともあるめえ。 と落着く八藏。 得三は頭を振り、否、他の奴と違ふ。 ありやお前、倉瀬泰助というて有名な探偵だ。 見る、あの頼桁の創の痕を。 な、三日月形だらう、此界限で些でも後暗いことのある者は、彼を知らぬは無いくらゐだ。 といへば八藏はしたり顔にて、」「我れも、あの創を目標にして這ツ面を覺えて居りますのだ。」「むゝ、汝はな、是れから直ぐに彼奴の後を跟けて何をするか眼を着ける。」「飲込ました。」「實に容易ならぬ檻褸が出た。 少しでも脱心が最後、諸共に笠

の臺が危ないぞ。と警戒れば、八藏は高慢なる顔色にて、「たかゞ生ツ白い瘦せた野郎、鬼神ではあるめえ。一思ひに捻り潰してくれう。と力癩を叩けば、得三は夥度頭を振り、「うんや、汝には對手が過ぎるわ。敏捷い事あ狐の様で、何して喰へる代物ぢや無え。しかし隙があつたら殺害ツちまへ。」

洵や泰助が一期の失策、平常の如く化粧して頬の三日月は塗抹居たれど、極暑の時節なりければ、繪具汗のために流れ落ちて、創の露れしに心着かず、大事の前に運悪くも悪人の眼に止まりたるなり。

さりとも知らず泰助は、略此家の要害を認めたれば、日の暮れて後忍び入りて内の様子を探らむものと、踵を返して立去りけり。

表二階より之を見て、八藏は手早く身支度整へ、「どれ後を跟けませう。くれ／＼も脱心なよ。」合點だ。と鐵の棒の長さ一尺ばかりにて握太きを小脇に隠し、勝手口より立出しが、此

家は用心嚴重にて、つい近所への出入にも、鎖を下
す掟とかや。心急きたる折ながら、八藏は腰なる
鍵を取り出して、勝手の戸に外より鎖を下し、急ぎ
門前に立出で、滑川の方へ行く泰助の後より、登
音ひそかに跟け行けども、日は傾きて影も射映ねば、
少しも心着かざりけり。

五 妖怪沙汰

泰助は旅店に歸りて、晚餐の前に湯に行きつ。
湯殿に懸けたる姿見に、不圖我顔の映るを見れば、
頬の三日月露れ居たるにぞ、心潜かに驚かれぬ。
ざつと流して座敷に歸り、手早く旅行鞆を開きて、
小瓶の中より繪具を取り出し、好く顔に彩りて、懷中
鏡に映し見れば、我ながら其巧妙なるに感ずるばかり
旨々と一皮被りたり。

今夜を過さず赤城家に入込みて、大秘密を發きく
れむ。まづ其様子を聞き置かむと、手を叩きて亭
主を呼べば、氣輕さうな天保男、とつかは前に出來
りぬ。「御主人外でも無いが、あの雪の下の赤
城といふ家。と皆まで言はぬに早合點、「へい、
なるほど妖物邸。」「其妖物屋敷といふのは何い
ふ理窟だい。「さればお聞きなさいまし。ま
づ御免被つて、と座を進み、「種々不思議があり
ますので、第一あゝいふ大きな家に、棲んで居るも
のがございませぬ。「空家かね、「否、其處
んところ不思議でござすて。ちやんと門札も出て

居りますが何者が住んで居るのか、其が解りません。
「ふゝむ、餘り人が出入をしないのか。」
「時々、あの邊で今まで見た事の無い婆様に逢ふものがございますが、何でも安達が原の一家の婆々といふ、それは、凄いな體ださうで。これは多分山猫の妖精だらうといふ風説でな。」
「それぢやあ風の吹く晩には、絲を繰る音が聞えるだらうか。」
「そこまでは存じませんが、折節女の、ひい、ひい、と悲鳴を上げる聲が聞えたり、男がげら／＼笑ふ聲がしたり、や、も、散々な妖原だといひますで。」
とこれを聞きて泰助は乗出して、「眞個なら奇怪な話だ。まづお茶でも一ツ・・・といふ一
眼小僧は出ないかね。とさも聞惚れたる風を装ほひ、愉快げに問ひ懸れば、こは怪談の御意に叶ひしことゝ亭主は頻に乗地となり、「否世が此の通り開けましたで、左様いふ甘口な妖方はいたしません。東京の何とやら館の壮士が、大勢で此前の寺へ避暑に來てゝございますが、其風説を聞いて、一番妖物退治をしてやらうといふので、小雨の降る夜二人連で出掛けました。草蓬々と茂つた庭へ入り込んで、がさ／＼騒いだと思し召せ。づどん／＼と何處か

で短銃ピストルの音おとがしたので、眞蒼まっさをになつて遁にげて歸かへると、朋輩ほうばいのお方が。そりや大方おほかた天狗てんぐが嚏くさまをしたのか、さうでなければ三ツ目め入道にふだうが屁へを放ひつた音おとだらう。誰某だれそれは屁玉へたまを喰くらつて凹へこんだと大きおほに笑わらはれたさうで、もう懲こり々くして、誰だれも手出てだしは致いたしません、何なんと、短銃ピストルでは、石見重太郎いはいぢゅうたらう宮本みやもとの武蔵むさしでも叶かなひますまい。と澁茶しぶちやを一杯ばい。舌したを濡ぬらして言ことばを繼つぎ、串戲じょうだんは儲置さておき、まだノ、氣味きみの悪いわるのは。と聲こゑを低ひくくし、幽靈れいこが出来ますで。こは聞處きこころと泰助たいすけは、「人ひと、まさか幽靈いうれいが。と態わざといへば亭主ていしゆは至極しごく眞面目じめいになり、「否いへ、人ひとから聞きいたのではございません。私わたくしが慥たしかに見みました。「はてな。「思おもひ出すと戰慄ぞつといたします。と薄氣味うすきみ惡わるげに後ごしろを見返みかえり、「部屋へやの外そとが直すぐ森もりなので、風通かぜとほしは宜ようございますが、こんな時ときには、些何ちひなの四隅しごみに目めを配くばりぬ。

泰助たいすけは思おもひ當あたる事ことあれば、尚なほも聞きかむと亭主ていしゆに向むかひ、「談はなしてお聞きかせなさい、實じつに怪談くわいだんが好物かうぶつだ。」「餘あまり陰氣いんきな談はなしをしますと是非ぜひ魔まが魅さすといひますから。と逡巡しりしりすれば、「馬鹿ばかなことを、と笑わら

はれて、「それでは燈を點して懸りませう。暗

くなりました。」「怪談は暗がりに限るよ。

「えゝ！ 仕方がありません。先月の半ば頃一日

晩方の事・・・」

此時座敷寂として由井が濱風陰々たり。障子の

棧も見えずなり、天井は墨の如く四隅は暗く物凄く、

人の顔のみやう／＼仄めき、逢魔が時とぞなりにけ

る。亭主は愈々心臆し、團扇にてはた／＼と、腰

の邊を煽ぎ立て、景氣を附けて語りけるには、

「丁度此時分用事あつて、雪の下を通り懸り、豫て

評判が高いので、怯氣々々もので歩いて行くと、甲

走つた婦人の悲鳴が、青照山の笥に響いて・・・

きいきいつ。「あゝ、嫌否な聲だ。

「は 我ながら何ともいへぬ異變な聲でこ

ざいます。と泰助と顔を見合せ、亭主は膝下まで

ひたと摺寄り、「えゝ其が私は襟許から、氷を浴

びたやうな氣が致して、釘附けにされたやうに立止

つて見ました。有様は腰ががついて歩行けませ

なんだの。すると貴客、赤城の高樓の北の方の

小さな窓から、ぬうと出たのは婦人の顔、色眞蒼で

頬ほ面づは消きえて無ないといふほど瘡やせつこけて、髪かみの毛けが
此これから此これへ（ト仕方しかたをして）かういふ風ふう、ぱつ
ちり開あいた眼めが、ぴかりとしたかと思おもふと、魂たま消ぎつ
た聲こゑで、助たすけて 助たすけて と叫さけびまし
た。
「

語かたるを聞きいて泰助たいすけは心こゝろの中うちに思おもふやう、いかさま
得とく三さんに苛責かじやくされて、下枝しげか或あるひは妹いせとか、さることもあ
らむかし。活命なごらへてだにあるならば、追おつ着つけ救すくひ得えさ
せむずと、漫そゞろに憐あはれを催もよおしぬ。談話はなし途切とぎれて宿やどの亭てい
主しゆは、一服ぶくす吸すはむと暗くら中がを、手探てさぐりに、煙管きせるを捜さがし
て、「おや、變へんだ。爰こゝに置おいた煙管きせるが見みえぬ。
あれ、魔ま隠かくし、氣味きみの悪わるい。と尚なほ其處ここ此處こゝを見廻みまわせ
しが、何者なにものをか見みたりけむ。わつと叫さけぶに泰助たいすけも
驚おどきて、見遣みやる座敷ざしきの入口いりぐちに、煙けむりの如ごとき物體ものあつて、
朦朧もつろつとして漂たぐよへり。彼あれはと認みとむる隙ひまも無なく、電いなづま？
ふつと暗やみ中に消きえ、やがて泰助たいすけの面めん前ぜんに白しろき女をんなの
顔かほ顯あらはれ、拭ぬぐひたらむ様やうに又また消きえて、障子しやうじにさばく亂みだれ
髪がみのさら／＼といふ音おとあり。

六 亂れ髪

亭主の叫びし聲を怪しみ、慌しく来る旅店の内儀、
「まあ何事でござんすの、と洋燈を點けて据ゑ置
きなから、床の間の方を見るや否や、
「ン、と返るを抱き止めて、泰助屹と振返れば、柱隠しの姿
繪といふ風情にて、床柱に凭れて立つ、あら怪しき
婦人ありけり。」

熟々其婦人を見るに、年は二十二三なるべし。

しを／＼とある白地の浴衣の、處々裂け破れて肩や
腰の邊には、見るもいぶせき血の汚點たるを、亂次
無く打纏ひ、衣紋開きて帯も占めず、紅のくけ紐を
胸高に結びなし、脛も顯はに取亂せり。露垂るば
かりの黒髪は、ふさ／＼と肩に溢れて、柳の腰に纏
ひたり。膚の色眞白く、透通るほど清らかにて、
顔は太く蒼みて見ゆ。但屹としたる品格ありて眼
の光凄まじく、頬の肉落ち、頤細りて薄衣の上
より肩の骨の、いた／＼しげに顯はれたるは世に在
る人とは思はれず。強き光に打たれたれば、消えも
やせむと見えけるが、今泰助等を見たりし時、物を

も言はで莞爾と白齒を見せて笑める様は、身の毛も
彌立つばかりなり。

人々ものを言ひ懸くれど、答は無くて、唯にこゝ
と笑ふを見て、始め泰助は近隣の狂女ならむと見
て取りつ、問へばさるものは無しといふ。今も猶
懷中せる今朝の寫眞に心附けば、憔悴果てゝ其面影
は無けれども、氣ばかり肖たる處あり。さては下
枝の如何にしてか脱け出でゝ來しものにはあらずや。
日夜折檻をせらるゝと聞けば、責苦にや疲れけむ、
呼吸も苦しげに見ゆるぞかし。之は此儘に去し難
しと、泰助は亭主に打向ひ、「何處か閑靜な處へ
寢さして、まあゝ氣を落着かして遣るが可い。
當家へ入つて來たのも、何かの縁であらうからと、
勸むれば、亭主は氣の好き男にて、一議も無く承引
なし、「向側の行當の部屋は、窓の外がすぐ墓原
なので、お客がございませんから、幽霊でさへ無け
りや、其へ連れて行つて介抱して遣はしませう。
といひつゝ女房を見返りて、「おい、御女中をお
連れ申して進ぜなさいと、命つけられて内儀は恐々、
手を曳いて導けば、怪しき婦人は逆らはず、素直に

夫婦ふうふに従したがひて、さも其情そのなさけを謝しやするが如ごとく秋波しゅうはな斜なめに
泰助たいすけを見返みかえり／＼、蹠よろ踵／＼として出いで行きぬ。

面おもてにべつたり蜘蛛くもの巢すを撫な拂ではらひて、縁えんの下したより這はひ
出いづるは、九太夫だいつぶには些男ちしをこが好過よすぎる赤城あかぎの下男げなん八
藏だうなり。彼かれ先刻さきに泰助たいすけの後あとを跟つけ來きたりて、此座敷このざしき
の縁えんの下したに潛ひそみて居をり、散々さん／＼藪蚊やぶかに責せめられながら、
疼痛いたみを堪こらふる天晴あつぱれ豪傑がうけつ、斯かくてあるうち黄昏たそがれて、
森もりの中なか暗くらうなりつる頃ころ、白衣びやくえを着つけたる一人ひとりの婦人ふじん、
樹きの下蔭したかげに顯あられ出いでつ、徐やら歩あゆを運はこばして、雨戸あまどは
繰くらぬ縁側えんがはへ、忍しのびやかに上のぼりけるを、八藏だう臙氣おぼろけに
見みてもしや其それ、はて好よく肖にた婦人をんなもあるものだ、下しつ
枝えは一室ひとまに閉込とごめあれば、出でて來きらるべき道理だうりは無なし
きが、と尚なも様子ようすを聞き居あるに、頭あたまの上うへなる座敷ざしきに
は、人ひとの立騒たちさわぐ氣勢けはひあり。幽靈いうれいなど、動搖どうようきしが
漸やくに靜しづまりて、彼方あなたへ連つれ行ゆき介抱かいほうせむと、誘いざなひ
行ゆきしを聞澄きすすまし、縁えんの下したよりぬつと出いで蚊かを拂はひ
つゝ澁面しぶめんつくり、下枝しづえならむには一大事だいじ、熟とくと見届みとち
けて爲せむ様やうあり、と裏手うらての方ほうの墓原はかはらへ潛ひそかに忍しのび行ゆき
たりける。

座敷には泰助が、怪しき婦人を見送りて、下枝の
寫眞を取り出し、洋燈に照して彼と此と見較べて居る
處へ、亭主は再び入來りて、「お客様、寢床を敷
いて遣りますと、僵れる様に臥りました。何だか
不便な婦人でございます。」「其は深切に好くし
てお遣なすつた。而して何とか言ひましたかい。
「彼は唾ぢやないかと思はれます。何を言つて
も聞えぬやうでございます。」「何しろ談話の
種になりさうだね。」「いかさまな。」「で、
私は之から鳥渡行つて來る處がある。御當家へ迷
惑は懸ないから、歸るまで如彼して藏匿て置いて下
さらないか、衣服に血が附てたり、おど／＼して居
る處を見ると、邪慳な姑にいびられる嫁か。
「なるほど。」「或は繼母に苦しめられる娘か。
「勾引された女で、女郎にでもなれと責められる
のか。こりや、もし好くある奴でございますぜ。
「うむ其邊だらう。何でも曰附に違ひないか
ら、御亭主、一番俠客氣を出しなさい。」「はあ
て、ようござえさあ、ほい、と直ぐと其氣になる。
は／＼は／＼。か／＼らむには後に懸念無し。亭
主もし二の足ふまば我が職掌をいふべきなれど、藏

匿ふことを承知したなれば其にも及ばず都合可し。
人情なれば此婦人を勦りてやる筈なれど、大犯罪、
人前にあり、これ忽にすべからずと、泰助は急ぎ
身支度して、雪の下へと出行きぬ。赤城の下男八
藏は、墓原に来て突當の部屋の前に、呼吸を殺して
居たりしが、他の者は皆立去りて、怪しと思ふ婦人
のみ居残りたる様子なれば、倒れたる墓石を押し寄
せて、其上に乗りて伸び上り、窓の戸を細う開きて
差覗けば、彼の婦人は此方を向きて横様に枕したれ
ば、顔も姿も能く見えたり。「やあ！と驚き
の餘り八藏は、思はず聲を立てけるにぞ、婦人は少
し枕を上げて、窓をおふぎ見たる時、八藏ぬつと顔
差出し、拳に婦人掴む眞似して、「汝、これだぞ、
と睨めつくれば、連理引きに引かれたらむやうに、
婦人は跳ね起きて打戦き、諸袖に顔を隠し、俯伏に
なりて、「あれえ。

七 籠の匣

倉瀬泰助は旅店を出で、雪の下への道すがら、
一叢樹立の茂りたる林の中へ行懸りぬ。月いと清
うさしいで、葉裏を透して照らすにぞ、偶然思ひ
付く類の三日月、又露れはせざるかと、懐中鏡を
取出せば、きらりと輝く照魔鏡に怪しき人影映りけ
るにぞ、はつと鏡を取落せり。

とたんに鐵棒空に躍つて頭を目懸けて曳！と下
す。さしつたりと身を交せば、狙ひ外れて發奮を
打ち路傍の岩を眞二つ。石鐵戛然 火花を散らし
ぬ。こは彼の惡僕八藏が、泰助に尾し來りて、十
分油斷したるを計り、狙撃したりしなり。僥倖に
鏡を見る時、後に近接曲者映りて、さてはと用心し
たればこそ身を全うし得たるなれ。

「了つた。と叫びて八藏が、鐵棒を押取直すを、
泰助ははつたと睨め付け、

「御用だ。と大喝一聲、怯む處を附け入つて、
拳の一電 手鍊のあてに、八藏は急所を撲たれ、

蹈反りて、大地はニと響きけり。

「月夜に暗殺、馬鹿々々しい、」
と打笑ひつゝ、泰助は曲者の顔を視めて、「おや、
此奴は病院へ来た奴だ。赤城の手下に違ひない
が、ふむ敵はもう我が来たことを知つてな。こ
りや油断がならぬ哩。危険々々、ほんの一機で此
石の通りになる處、馬鹿力の強い奴だ。と舌を巻
きしが、「待て、何ぞ手懸りになる様な、掘出し
物があらうかも知れぬ。と斯る折にも油断なく八
藏の身體を檢して腰に附けたる鍵を奪ひぬ。時に
取りては千金にも勝りたる獲物ぞかし。之あらば
赤城家へ入込むに便あり造化至造妙と莞爾と頷き、
袂に納めて後をも見ず比企が谷の森を過ぎ、大町通
つて小町を越し、坐禅川を打渡つて
急ぎ候
ほどに、雪の下にぞ着きにける。

(談話前にもどる。)

却説赤城得三は探偵の様子を窺へとて八藏を出し
遣りたる後、穩かならぬ顔色にて急がはしく座を立

ちて、二室三室通り抜けて一室の内へ入り行きぬ。
こは六疊ばかりの座敷にて一方に日蔽の幕を垂れた
り。三方に壁を塗りて、六尺の開戸あり。床の
間は一間の板敷なるが懸軸も無く花瓶も無し。但
床の中央に他に類無き置物ありけり。鎌倉時代の
上臈にや、小袿しやんと着こなして、練衣の被を深
く被りたる、人の大ききの立姿。溢るゝ黒髪小袖
の褌、色も香もある人形なり。言はぬ高峰の花な
れば、手折るべくもあらざれど、被の雲を押分けて
月の面影洩出でなば、臈長けたらむといと床し。

得三は人形の前に衝と進みて、どれ、鳥渡。上
臈の被を引き上げて、手燭を翳して打見遣り、
「むゝ可々。と獨言。舊の如く被を下して、
後刻に高田が来る筈だから、此の方は彼にくれて
遣つて、金にするとしまづ可しと。處ろで下枝
の方は、我れが女房にして、公債や鐵道株、ありた
けの財産を、我れが名に書き替へてト大分旨い仕事
だな。しかし下枝めがまた悪く強情で始末にをへ
ねえ。手を替へ、品を替へ、撫つ抓りつして口説
いても應と言はないが、東京へ行懸けに、梁に釣し

て死ぬ様な目に逢はせて置いたから、些は應へたらう。其に本間の死んだことも聞かして遣つたら、十に九つは此方の物だ。何うやら探偵が嗅ぎ附けたらしい。何も彼も今夜中に仕上げざるめえ。其代り翌日から御大盡だ。どれ、ちよびと隠妾の顔を見て慰まうか。と豫てより下枝を幽閉せる、座敷牢へ赴くとて、廻廊に廻り出で、欄干に凭り懸れば、此處はこれ赤城家第一の高樓にて、屈曲縦横の往來を由井が濱まで見通しの、鎌倉半面は眼下にあり。

山の端に月の出汐見るとも無く、比企が谷の森の方を眺むれば、目も遙かなる畦道に、朦朧として婦人あり。黒髪颯と夜風に亂して白き衣服を着けたるが、月明りにて晝ける如く、南をさして歩むが如し。

得三は「呀と驚き、
「彼は慥に下枝の姿だ・・・否、否、三年以来、あの堅固な牢の内へぶちこんであるものを、まさか魔術を使ひはしめえし、戸外へ脱けて出る道理が無い。こりや心の

迷ひだ。脱がしてはならぬ／＼と思つてるからだ。
此ばかりの事に神経を悩すとは、えゝ、意氣地の無
い事だ。いかさまな、五十の坂へ踏懸けちやあ、
ちと繕が戻らうかい。だが油断はならない、早く
行つて見て安心しよう。何、居るに違ひ無い
が・・・まゝよ念の爲だと、急がはしく、馳せ
行きて北の臺と名づけたる高樓の、怪しげなる戸口
に到り、合鍵にて戸を開けば、雷の如き音ありて、
鐵張の戸は左右に開きぬ。室内に籠りたる生暖き
風むんむと面を撲ちて不快きこといはむ方無し。

手燭に照して見廻はせば、地に歸しけむ天に朝し
けむ、よもや／＼と思ひたる下枝は消えてあらざり
けり。得三は顛倒して血眼になりぬ。

八 幻影まぼろし

先刻さきに赤城あかぎ得三とくが、人形室にんぎやうしつを出行いできたる少時しばらく後に、
不思議ふしぎなることこそ起おこりたれ。風かぜも無なきに人形にんぎやうの
被かつき揺ゆめき落おちて、妖麗あでやかなる顔かほの洩もれ出いでぬ。瑠璃るり
の如ごとき眼めも動うごくやうなりしが、怪あやしい哉かな影法師かげぼふしの如ごと
き美人びじん静々しづくと室まの中うちに歩あゆみ出いでたり。此この幻影まぼろしたへ
ば月夜つきよに水みづを這はふ煙けぶりに似にて、手てにも取とられぬ風情ふぜいな
りき。

折をりから疊障たみざはりの荒あらかなる、瑩音あしおと彼方かなたに起おこりぬれ
ば、黒くろき髪かみと白しろき顔かほはふつと消きえ失うせ、人形にんぎやうは又また舊もと
の通とほり被かつきを被かむりぬ。

途端とたんにがたひしと戸とを開あけて、得三とくは血眼ちまなこに、此この
室しつに駈かけ込こみ、「此この方ほうは奈何どとうだらう。あの様やう
子すでは同おなじく翼はねが生はえて飛とび出したかも知しれぬ。さ
あ事ことだ、事ことだ、飛とんだ事ことだ。もう一度ひと見みねばなら
ない。と小洋燈こともしの心しんを繰くり上げて、荒々あらかしく人形にんぎやうの
被かつきをめぐり、熟とくと覗のぞきて舊もとのやうに被かつきを下おろし、
「うむ、此この方ほうは何なにも別條べつてうは無なしい。やれ此これで少すこし

は安堵あちつひた。其それにしても下枝しづえめは何どうして失うせた知らん。婆々ばゝあが裏切うらぎりをしたのではあるまいか。むゝ、何なにしろ一番ばん糺明たゞして見みようと、掌たなそこを高く打鳴うちならせば、稍やゝありて得三とくの面前めんぜんに平伏ひれふしたるは、當家たうけに飼殺かひころしの飯炊めしたきにて、お録ろくといへる老婆らうばなり。

得三とくは聲鋭こゑのめだく、「お録ろく、下枝しづえを何處どこへ遁にがした。

と睨附ねめつくれば、老婆らうばは驚おどろきたる顔かほを上げ、「へい、下枝しづえ様さんが何なにかなさいましたか、「しらばくれるない。屹度きつときさま汝にが遁にしたんだ。「否いゝえ、一向かうに存ぞんじません。「汝うぬ、言いツちまへ。「些ちつとも存ぞんじま

せん。「ようし、白状はくじょうしなけりや斯こうするぞ。

と懐中くわいぢゆうより装弾たまこめしたる短銃ピストルを取とり出し、「打殺ぶちころすが可いいか。とお録ろくの心前むなさきに突附つきつくれば、足下あしもとに踞うづくまりて、「何なんで其その様な事ことをいたしませう。旦那だんな様が

東市とうぢへ行いらつしやつてお留守あその間まも私わたくしはちやんと下枝しづえ様の番ばんをしてをりました。縄なはは解といて遣やりました

たけれども。「それ見みろ。さういふ糞くそ慈悲じひを垂たれやあがる。我われが歸かへるまで應うむといはなけりや、

決けつして下あして遣やることはならないと、あれほど言置いひおいて行いつたぢや無いなしか。「でもひい／＼泣なきま

して耳の遠い私でも寝られませんか、其上主公、二日もあゝして梁に釣上げて置いちやあ死んで了ふぢやございませんか。「えゝ！ そんなことは何うでも可い。何處へ遁したか、其を言へッてんだ。「つい今の前も北の臺へ見廻りに参りましたら、下枝様は平常の通り、牢の内に僵れて居ましたのに、俄に居無くなつたとおつしやるが、實とは思はれません。と言解様の我を欺くとも思はれねば、得三は疑ひ惑ひ、さあらむには今しがた畦道を走りし婦人こそ、籠を脱けたる小鳥ならめ、下枝一たび世に出なば悪事の露顯は瞬く間と、おのが罪に責められて、得三の氣味の悪さ。惨たらしう殺したる、蛇の鎌首ばかり、飛失せたらむ心地しつ立つても居ても落着かねば、いざふれ後を追懸けて、草を分けて探し出し、引摺つて歸らむとお録に後を頼み置き、勝手口より出でむとして、押せども、引けども戸は開かず。「八藏の馬鹿！ 外から鎖を下して行く奴があるもんか。とむかばらたちの八ツ當り。

折から玄關の戸を叩きて、「頼む、頼む。と

音訪ふ人あり。 聞覚えある聲は其、とお録内より
戸を開らけば、外よりずつと入るは下男を連れたる
紳士なりけり。 之は高田駄平とて、横濱に住める
高利貸にて、得三とは同氣相集る別懇の間柄なれば、
非義非道を以つて有名く、人の活血を火吸器と渾名
のある男なり。 召連れたる下男は銀平といふ、高
田が氣に入りの人非人。 いづれも法衣を絡ひたる
狼ぞかし。

高田は得三を見て聲をかけ、 「赤城様、今晚は。
得三は出迎へて、 「これは高田様でございますか。
まあ、此方へ。 と二階なる密室に導きて主客@三
人の座まりぬ。 高田は笑ましげに巻蓆を吹かして、
「早速ながら、何は、令嬢は息災かね。」

「え、お藤の事でございますか、 「左様さ、私
の情婦、は、は、は、と溶解けむばかりの顔色
を、銀平は覗きて追従笑ひ、 「ひ、ひ、ひ。 得三
は苦笑ひして、 「藤は變つた事はございません。
御約束通り、今夜貴下に差進げるが。
實は下枝ね。 「は、あ。 「彼が飛んだこと
になりました。 「ふむ、死にましたらう。 だ

から言はないことか、あんなに惨いことをなさるなと。 到々責殺したね。 非道ことをしなすつた。

「否、死んだのならまだしも可いが、何してか逃げました。 「なに！ 遁げたえ？ 「其で今搜

しに出ようといふところですよ。 「む、其は

飛だ事だ。 猶豫をしちや不可せん。 彼嬢が饒舌

と一切の事が發覺つちまふ。 宜しい銀平にお任せ

なさい。 喃、銀平や、お前はさういふことに馴れ

て居るから、取急いで探してお進げ申しな。 と命

くれれば得三も、探偵に窺はるゝことを知りたれば、

家を出でんは氣懸りなりしに、これ幸と銀平に、

「ぢや御苦勞だが、願ひます。 私どもは後に些と

用事があるから、といへば、元來同穴の貉にて、總

てのこゝろを知るものなれば、銀平は頷きて、 「へ

い宜しうございます。 下枝様が如彼いふ扮装のまゝ

飛出したのなら、今頃は鎌倉中の評判になつてゐるに

違ひありません。 何をいはうと狂氣にして引張つ

て参ります。 血だらけのあの姿ぢや誰だつて狂氣

といふことを疑ひません。 旦那、左様なら、此か

ら直ぐに。 と立上るを得三は少時と押し止め、

「例のな、承知でもあらうが、三日月探偵が此地へ

來て居るから、油斷のないやうに。と念を入れるれ
ば、「其は重々容易ならぬことだ。銀平しつか
りやつてくん。と高田も言を添へにける。銀
平とんと胸を叩きて、「御配慮なされますな。
と氣輕に飛出し、表門の前を足早に行懸れば、前途
より年少き好男子の此方に来懸るにはたと行逢ひけ
り。擦違うて兩人齊しく振り返り、月明に顔を見
合ひしが、見も知らぬ男なれば、銀平は其儘歩を移
しぬ。これぞ倉瀬泰助が、惡僕八藏を打倒して、
今しも此處に来れるなりき。

九 破廂

泰助は晝来て要害を見知りたれば、其足にて直ぐと赤城家の裏手に行き、垣の破目を潜りて庭に入りぬ。

目も及ばざる廣庭の荒たき儘に荒果てゝ、老松古杉蔭暗く、花無き草ども生茂りて踏むべき路も分難し、崩れたる築山あり。水の涸れたる泉水あり。倒れ懸けたる祠には狐や宿を藉ぬらむ、耳許近き木の枝にのりすれ／＼梟の鳴き連るゝ聲いと凄まじ、木の葉を渡る風はあれど、塵を清むる箒無ければ、蜘蛛の巣計り時を得顔に、霞を織る様哀なり。妖物屋敷と言合るも、道理なりと泰助が、腕拱きてイみたる、頭上の松の茂を潜りて天より颯と射下す物あり、足許にはたと落ちぬ、何やらんと拾ひ見るに、白き衣切やうのものに、礫を一つ包みてありけり。押開きて月に翳せば、鮮々しき血汐にて左の文字を認めたり。

虐殺にされやうとする女が書きました。何

卒、此家の内から助け出して下さいまし。・・・
・書様の亂れたる字の形の崩れたる、筆にて運び
し物にはあらず。思ふに指など喰ひ切りて其血を
其手ににじり書き、句の終りには 夥しく血のぬ
ら／＼と流れたるを見て、泰助はほろりと落涙せり。

之を投げたるは、下枝か、藤か。 目も當てられ

ぬことどもかな。 いで我來れり、泰助あり、今夜
の中に地獄より救ひ取りて、明日は此世に出し參ら
せむ。 そも何處より擲ちたらむと高樓を打仰げど、
其かと見ゆる影も無く、森々と松吹く風も、助けを
呼びて悲しげなり。 屹と心を取直し、丈に伸びた
る夏草を露けき袖に押分け、尚奥深く踏入りて忍
び込むべき處もやと、彼方此方を経歴るに、驚くば
かり廣大なる建物の内に、住む人少なければ、燈の
影も外へ洩れず。 破廂より照射入る月は、崩れし
壁の骨を照して、家内寂寞として墓に似たり。 稍
ありて泰助は、表門の方に出で、玄關に立向ひ、戸
を推して試むれば、固く内より鎖して開かず。 勝
手口と覺しき處に行きて、もしやと引けども同じく
開かず。 如何せむと思ひしが、不圖錠前に眼を着

くれば、こは外より鎖せしなり。試みに袂を探りて、悪僕より奪ひ置きたる鍵を嵌むれば、きしと合ひたる天の賜物、「占めた。」と捻ぢれば開くにぞ、得たりと内へ忍び入りぬ。

暗闇を歩むに馴れたれば、爪先探りに聲音をたてず。やがて壇階子を探り當て、「此で、まづ、仕事に一足踏懸けた。と耳を澄まして窺へど、人の氣附たる様子も無ければ、心安しと二階に上りて、壁を洩れ来る月影に四邊を屹と見渡せば、長き廊下の兩側に比々として部屋並べり。大方は雨漏に朽ち腐れて、柱ばかり参差と立ち、疊は破れ天井裂け、戸障子も無き部屋どもの、昔はさこそと憚るゝが一い二ウ三いと數ふるに勝へず。遙か彼方に戸を閉じたる一室ありて、燈火の灯影幽かに見ゆるにぞ、要こそあれと近附きて、ひたと耳をあてゝ聞くに、人のあるべき氣勢もなければ、潜かに戸を推して入込みたる、此室ぞ彼の人形を置ける室なる。

垂れ下したる日蔽は、これ究竟の隠所と、泰助は雨戸と其幕の間に、電の如く身を隠しつ。と

見れば正面の板床に、世に希有しき人形あり。人形の前に坐りたる、十七八の美人ありけり。

泰助は呼吸を殺して其様を窺へば、美人は何やら
む深く思ひ沈みたる風情にて、頭を低れて傍目もふ
らず、今の入りたる事は少しも心附かざりき。額
襟許清らに見え、色いと白く肉置き好く、髪房やかに
結ひたるが、妖麗なることいはむ方無し。美人
は正坐に堪へざりけん、居坐亂して泣きくづをれ啜
り上げつゝ獨言やう、「あゝ悪人の手に落ちて、
遁げて出ることとは出来ず、助けて下さる人は無し。
あの高田に汚されぬ先に、一層此儘死にたいなあ、
お姉様は何う遊ばした知ら、定めし私と同じ様に。
と横に倒れて唯泣に泣きけるが、力無げに起直り赤
めたる眼を袖にて押し拭ひて、件の人形に打向ひ、
「人形や、好くお聞き。お前はね。死亡遊ば
した母様に、よく顔が肖てお在だから、平常姉様と
二人して、可愛がつてあげたのに、今こんな身にな
つて居るのを、見て居ながら、助けてくれないのは
情ないねえ、怨めしいよ。御覽な、誰も世話をし
ないから、此暑いのに綿の入った衣服を着てお在だ

よ。私を舊のやうにしてお呉れだつたら、甘味い御膳を進げようし、衣服も着換へさせますよ。お前のに綺麗な衣服を、姉様と二人で縫ひ上げて、翌日は着せてあげようと楽しみにして寝た晩から、あの邪慳な得三に、かうされたのはよく御存じでないかい。今夜は高田に恥かしめられるからさあ、何かして下さいてばよう。えゝ、これほどいふのに返事もしないかねえ。と犇と上臈の腰に縋りて、口説きたるには、泰助も涙ぐみぬ。

美人は又た、「あれ堪忍して下さいませよ。貴女は假にも母様、恨みがましいことを申して濟みませんでした。でもゝう神様も、佛様も、妾を助けて下さらないから、母様何卒助けて下さい。さうでなくば、私を殺して早うお傍に連れて行つて下さいまし、よ、よ。と力一杯抱占めて、身を震はせば人形もともにわなゝく如くなり。

泰助は見るに忍びず。いでまづ此嬢を救ひ出さむ、家の案内は心得たれば背負うて遁げむに雑作は無しと幕を掲げて衝と出でたり。不意に驚き、

「あれ。と叫びて、泰助聲をも懸けざるに、身を
翻して、人形の被を潜つて入るよと見えし、美人は
消えて見えなくなりぬ。あまりの不思議に呆氣に取
られ、茫然として眼をぱち／＼、「不思議だ。」
不思議と泰助は、潜かに人形の被の端へ片手を懸
けたる折こそあれ。部屋の外にどや／＼と跽音し
て、二三人が來れる様子に、南無三寶飛び退りて再
び日蔽の影に潛みぬ。

十夫婦喧嘩

高田の下男銀平は、下枝を捜し出さむとて、西へ東へ彷徨つ。巷の風説に、耳を聳て、道行く人にも其とは無く問試むれど手懸り無し。南を指して走りしと得三の言ひたれば、長谷の方に行きて見むと覺束なうは思へども、比企が谷より滑川へ道を取つて行懸り、森の中を通るとき、木の根を枕に叢に打倒れたる者を見たり。

時すから悪き病疾に罹れるやらむ、近寄りては面倒、と慈悲心無き男なれば遠くより素通りしつ。

ましてしばし人を尋ぬる身にしあれば、人の形をなしたる物は、何まれ心を注ぐべきなり。と思ひ返して傍に寄り、倒れし男の面體を月影にて熟く見れば、豫て知己なる八藏の齒を喰切りて呼吸絶えたるなり。銀平これはと打驚き、脈を押へて候へば遙かに通ふ蟲の呼吸、呼び活けむと聲を張上げ、「八藏、やい八藏、何したノ、え、八藏ツ、と力任せに二つ三つニ拳を撲はせたるが、死活の法にや協ひけむ。うむと呻くに力を得て、「やい、緊乎しろ。と

勵ませば、八藏はやう／＼に、脾腹を抱へて起上り、
「あ痛、あ痛。……おほ痛え、痛え、畜
生非道いことをしやあがる。と澁面つくりて銀
平の顔を視め、
「銀平、遅かつたはやい。
「おらあ既での事で俗名八藏と拝まうとした。
「え、縁起でも無え廢止て呉れ。物をいふたび
に腹へこたへて、こてえられ無え。
「全體何う
したんだ。
八藏は頭を搔き／＼ありし事ども物語
れば、銀平は、驚きつ又便を得つ、
「ふむ、其で
は下枝は滑川の八橋樓に居るんだな。
「あ、
何してか紛れ込んだ。おらあ、窓から覗いて慥に
見た。何とか工夫をして引摺り出さうと思つてる
内に、泰助めが出懸ける様だから、早速跡を跟けて、
まんまと首尾よくぶつちめる處を、さん／＼にぶ
つちめられたのだ。
忌々しい。
「可し一所に
歩べ。行つて下枝を連れて歸らう。
「おつと
心得た。
「さあ行かうぜ。
「参りまする
／＼。何かと申すうちに、はやこゝは滑川にぞ着
きにける。

八橋樓の亭主得右衛門は、黄昏時の混雜に紛れ込

みたる怪しき婦人を、一室の内に寐ませ置き、心を
静めさせむため、傍へ人を近附けず。時経たば素
性履歴を聞き糺し、身に叶ふべきほどならば、力と
なりて得させむず、と性質たる好事情。かうして
あゝしてかうして、と獨りほく／＼頷きて、帳場に
坐りて脂下り、婦人を窺ふ曲者などの、萬一入り來
ることもやあらむと、内外に心を配り居る。

勝手を働く女房が、用事了うて襷を外し、前垂に
て手を拭き／＼、得衛の前へ丁と坐り、「お前様
何なさる氣だえ。」何するつて何を何する。

と空とばければ擦寄つて、「何をもないもんだよ。
分別盛りの好い年をして、といふ顔色の尋常ならぬ
に得右衛門は打笑ひ、「其方もいけ年を仕つてや
くな。といへば赫となり、「氣樂な事をおつし
やいますな。お前様見たやうな人を怪我にも妬く
奴があるものか。」おや恐ろしい。何を左様
がみ／＼いふのだ。「あゝいふ婦人を宅へ置い
て何な懸合にならうも知れませぬ。」其事なら
放棄ときな、おれが方寸にある事だ。ちやんと飲
込んでよ。「だつてお前様、御主筋の落人で

はあるまいし、世話を焼く事はござりませぬ。

「お前こそ世話を焼きなさんな。」
「否、あゝし

て置くと屹度庄屋様からお前を呼びに来て、手詰の
應對、寅刻を合圖に首討つて渡せとなります。

「其時は例の贖首さ。」
「人を馬鹿にしていらつ

しやるよ。」
「而して娘は居ず、さしづめ身代に

お前さね。」
「飛でもない。」
「うんや喜こば

つし。」
「何故喜ぶの。」
「はて、あの綺麗首

の代りにたてば、お前死んでも浮ばれるぜ。

「えゝ悔しい。」
「悔しい事があるものか。」
首

實檢に入奉る。」
死相變じてまづそのとほり、

はゝゝゝゝ。」
「お前はなあ。」
「これ、古風

なことをするな。」
呼吸が詰る、これさ。」
「鶏

が鳴いても放しはしねえ。」
早く追ひ出してお了ひ

なさい。」
「水を打懸けるぞ。」
「啖ひ附くぞ。

「苦、痛、眞個に啖ついたな。」
此狂女め、と振

拂ふ、むしやぶりつくを突飛ばす。」
がたぴしとい

ふ物音は皿鉢飛んだ騒動なり。

外に窺ふ、八藏、銀平、時分はよしとぬつと入り、

「あい、御免なさいまし。」

十一
みるめ、
かくはな

「はい、光來なさいまし、何ぞ御用。と得右衛門居住ひ直して挨拶すれば、女房も鬢のほつれ毛搔き上げつゝ静まりて控へたり。銀平は八藏に屹と目注せして己はつか／＼と入込めば、「それお客様御案内と、得衛の知らせに女房は、「此方へ。と先に立ち、奥の空室へ銀平を導き行きぬ。道々手筈を定めけむ、八藏は銀平と知らざる人の如くに見せ、其身は上口に腰打懸け、四邊をきよる／＼見廻すは、もしや婦人を尋ねにかと得右衛門も油斷せず、顔打守りて、「貴方は御泊ではございませんか。と問へばちよつとは答せず、煙草一服思はせぶり、とんとはたきて煙管を杖、「親方、逢はしとお呉ねえ。と異にからんで言懸くれば、其と察して轟く胸を、押鎮めてぐつと落着き、「逢はせとはそりや誰に。亭主ならば私ぢや、さあお目に懸りましょ。と此方も負けずに煙草をすば／＼。八藏は肩を動つてせゝら笑ひ、「おいらが媽々が来て居る筈、一寸逢はうと思つて来た。「ふむ、して何な御婦人だね。「些氣が狂れて血相變り、取亂だしては居るけれど、すらつとして中肉中脊、戦慄とするほど美しい女さ。と空嘯いて毛脛の蚊を

ひしやりと叩く憎體面。斯くては愈彼の婦人の身の上思ひ遣られたり、と得衛は屹と思案して、「其は大方門違ひ、私の代になつてから福の神は這入つても狂人などいふ者は、門端へも寄り附きません。と思ひの外の骨の強さ。八藏は本音を吐き、「おい、可加減に巫山戯て置け。これ知るまいと思つても、先刻ちやんと睨んで置いた、此處を這入つて右側の突當の部屋の中に匿藏であらうがな。と正面より斬つて懸れば、ぎよつとはしたれど受流して、「居たら又何とする。「やい、やい、馬鹿落着に落着ない。亭主の許さぬ女房を藏して置けば姦通だ。足許の明るい内に、さらけ出してお謝罪をしろと、居丈高に詰寄れば、「こりや可笑い、お政府に税を差上げて、天下晴れての宿屋なら、他人の妻でも妾でも、泊めてはならぬ道理は無い。其とも其方の女房ばかりは、泊めるなといふ掟があるか、さあ其を聞ukai。と言はれて八藏受身になり、むゝと詰りて頼脹らし、「何さ、そりや此方の商賣ぢや、泊めたが悪いといふでは無い。用があるから亭主の我が連れて歸るに故障はあるまい。といはれて否とは言はれねば、

得衛もぐつと行詰りぬ。八藏得たりと疊み懸けて、

「さあ、出して渡してくれ、否と言ふが最後だ。」

「乎と坐して大胡座。得右衛門思ひ切つて、

「居さへすれば渡して進ぜる、居らぬが實ぢやで

斷念さつし。と言はせも果てず眼を怒らし、

「まだノ、吐すか面倒だ。踏み込んで連れて行く、

と突立上れば、大手を擴げ、「どつこい遣らぬは、

誰でも來い、家の亭主此處に控へた。」「何をと、

八藏は隠し持つたる鐵棒を振翳して飛懸れば、非力

の得衛仰天して、蒼くなつて押隔つれど、腰はわな

ノ、氣はあぶノ、困じ果てたる其處へ女房を前に

銀平が一室を出で、駈け來りぬ。

銀平は何思ひけむ、勢に乗る八藏を取つて突除け

づいと立ち、「勾引の罪人、御用だツ。と呼ば、

れば、八藏もまた何とかしけむ、「え、と吃驚

身を翻がへして、外へ遁出し雲を霞、遁がすものか

と銀平は門口まで追懸け出で、前途を見渡し獨言、

「素早い、野郎だ。取遁がした、残念々々、と

引返せば、得右衛門は興覺顔にて、「つい混雜に

紛れまして、未だ御挨拶も申しません。貴方は今

しがた御着になつた御客様、さては其筋の。と敬へば、銀平したり顔に打顔き、「應、僕は横須賀の探偵だ。」

遁げると見せ懸け八藏は遠くも走らず取つて返し、裏手へ廻つて墓所へ入り、下枝が臥したる部屋の前に、忍んで様子を窺へり。

横須賀の探偵に早替りせる銀平は、亭主に向ひて聲低く、「實は、横須賀のさる海軍士官の令嬢が、江の島へ参詣に出懸けたまゝ、今以つて、歸つて來ない。と口より出任せの嘘を吐けど、今の本事を見受けたる、得右衛門は少しも疑はず。眞に受けて、「なるほど／＼。と感じ入りたる體なり。銀平いよ／＼圖に乗り、「えゝ、其で必定誘拐されたといふ見込でな。僕が探偵の御用を帯びて、所々方々と捜して居る處だ。」御道理。先刻からの様子では、お前の處に誰か婦人を藏匿つてある。其をば悪者が嗅ぎ出して、奪返しに來た様子だが。……と言ひつゝ亭主の顔を屹と見れば、鈍や探偵と信じて得右衛門は有體に、「左様、

其通り。實はこれ／＼の始末にて。と宵よりありし事を落も無くいうて退くれれば、銀平はしてやつたりと肚に笑みて、表面に益々容體を飾り、「は、あ、御奇特の事ぢや、聞く處では年齢と言ひ、風體と言ひ、全く僕が尋ねる令嬢に違ひ無い。いや、追つて其許に、恩賞の御沙汰これあるやう、僕から上申を致さう、慥かに其が見度いものぢやが、といふに亭主はほく／＼喜び、見事善根をしたる所存、傍聞する女房を流眇に懸けて、乃公の功名まつこのとほり、それ見たことかといはぬばかり。あはれ銀平が悪智慧に欺むかれて、いそ／＼と先達して、婦人を寝ませ置きたる室へ、手燭を取つて案内せり。

前には八藏驚破といはゞと、手ぐすね引きて待懸けたり。後には銀平が手も無く得右衛門に一杯くはして、奪ひ行かむと謀りたり。纔かに虎口を遁れ来て、仁者の懷に潛みながら、毒蛇の尾にて巻かれたる、下枝が不運憐むべし。

十二 無理強迫

赤城家にては泰助が、日蔽に隠れし處へ、人形
室の戸を開きて、得三、高田、老婆お録、三人の者
入来りぬ、程好き處に座を占めて、お録は携へ来り
たる酒と肴を置排べ、大洋燈に取替へたれば、室内
照りて眞書の如し。得三其時膝押向け、「高田
様、ぢあ、お約束通り證文をまいて下さい。高田
は懷中より證書を出して、金一千圓也と、書きたる
處を見せびらかし、「いかにも承知は致したが、
未だ不可ません。なにして了つたら、綺麗薩張と
お返し申さうまづそれまでは、と又懷へ納め、頤を
撫でゝ居る。「お録、それ／＼。と得三が促
し立つれば、老婆は心得、莞爾やかに高田に向ひて、
「お芽出度存じます。唯今花嫁御を。・・・
・と立上り、件の人形の被を掲げて潛り入りしが、
「じたばたせずにお來でなさい、といふ聲しつ。
今しがた見えなくなりたる、美人の小腕を邪慳に掴み
て、身を脱れむと悶えあせるを容赦なく引出しぬ。
美人は両手に顔を押へて身を竦まして戦き居たり。

得三之を打見遣り、「お藤、豫て言ひ聞かした通り、今夜は婿を授けて遣るぞ。嘸待遠であつたらうの。と空嘯きて打笑へば、美人はわつと泣伏

しぬ。高田はお藤をじろりと見て、「だが千圓は頗る高値だ。考へて御覽なさい。此程の

玉なら、漬に賣つたつて三年の年期にして四五百圓

がものはあります。其を貴下は、初物をせしめるばかりか、生涯のなぐさみにするのだもの、此方は

見切つて大安賣だ。千圓は安價いものだね。其も左様ぢやな。どれ、一つ杯を獻さう。此

處一寸お儀式だ。と獨り喜悦の助平顔、老婆は齒朶を露き出して、「直と屏風を廻しませうよ。

「其が可い。と得三は頷きけり。虎狼や鼻に取圍まれたる犠牲の、生きたる心地は無き娘も、

酷薄無道の此談話を聞きたる心はいかならむ。絶えも入るべき風情を見て、得三は叱るやうに、

「おい、藤。高田様がお盃を下さる、頂戴しろ。これツ、人が物を言ふに返事もしないか。と聲荒

らかに呼はりて、掴み挫がむ有様に、お藤は霜枯の蟲の音にて、「あれ、御堪忍なさいまし。

「何も謝罪する事無え。機嫌よくお盃を受けると

いふのだ。え、忌々しい、めそ／＼泣いてばかり居やあがる。これお録、媒人役だ。些、言聞かして遣んな。老婆は聲を繕ひて、「お嬢様、何したものでございますね。御婚禮のお目出度に、泣いて在らしつちやあ濟ません。まあ、涙を拭いて、婿様をお見上げ遊ばせ。如何に優しいお顔でございませう。其は／＼可愛がつて下さいますよ、ねえ旦那様、と苦笑ひ、得三は「さうとも／＼。」「眞個に深切な御方つちやあゝりません。不足をおつしやつては女、冥利が盡きますによ。貴女はお恥しいのかえ、と舐めるが如く撫で廻せば、お藤は身體を固うして、頭を掉るのみ答へは無し。高田は故意と怒り出し、「へむ、好い面の皮だ。嫌否なものなら貰ひますまい。女、早はしはしまいし。工手間が懸るんなら破談にするぜ。と不興の體に得三は苛立ちて、「汝、澁太い阿魔だな。といひさまお藤の手を捉ふれば、「あれえ。」「喧しいやい。と白き項を鷲掴み、「此阿魔、生意氣に人好をしゃあがる。汝何しても肯かれないか。と睨め附くれば、お藤は聲を震はして、「そればつかりは、どうぞ堪忍して下さいまし。

と諸手を合すいぢらしさ。「應、肯かれないな。
よし、肯かれないなきあ無理に肯かすまでのことだ。
仕て見せる事がある哩。といふは平常の折檻ぞと
お藤は手足を竦めける。得三は腕まくりして老婆
を見返り、「お録、一番責めなきや埒が開くめえ。
お客の前でニき廻ると見苦しい、ちよいと手を貸し
てくれ。老婆はチョツと舌打して、「ても強情
なお嬢だねえ。といひさま二人は立上りぬ。高
田は高見に見物して、「これ／＼臺無しにしては
悪い。「なあに、賣物だ。面に疵はつけませ
ん。

泰助は、幕の蔭より之を見て、躍り出むと思へど
も、敵は多し身は單つ、逸るは血氣の不得策、今い
ふ如き情實なれば、よしや殴打をなすとても、死に
致す憂はあらし。捕縛して其後に、渠等の罪を數
ふるには、娘を打たすも方便ならむか、さはさりな
がらいたまし、と出るにも出られずとつおいつ、
拳に思案を握りけり。

得三は豫て斯くあらむと用意したる、弓の折を振

上ぐれば老婆はお藤の手を扼りぬ。はつしと撲た
れて悲鳴を上げ、「あゝれ御免なさいまし、御免
なさいまし。と後へ反り前へ俯し、悶え苦しみの
りあがり、紅蹴返す白脛はたはけき心を亂すになむ、
高田駄平、は酔へるが如く、酒打ち飲みて居たりけ
り。

十三 走馬燈

無慙やなお藤は呼吸も絶々に、紅顔蒼白く變りつゝ、苛責の苦痛に堪へざりけむ、「ひい、殺して下さい殺して。と、死を決したる處女の心。よしや此儘撲殺すとも、随ふべくも見えざれば、得三殆ど責倦みて、腕を擦りて笞を休めつ。老婆はお藤を突放せば、身を支ふべき氣力も失せて、はたと僵れて正體無し。

得三は、といきを吐きて高田に向ひ、「御覽の通りで仕様がありません。式作法には無いことだが、お藤の手足をふん縛つて、さうして貴下に差上げませう、喃、お録、其が可いぢや無いか。

「其が好うございます。其後は活すとも殺すとも、高田様の御存分になさいましたら、ねえ旦那。といへば得三引取つて、「ねえ高田様。太平は舌舐ずりして、「慾にも得にももう逆もぢや哩。

左様して貰ひませうよ。「では證文をな。「うゝ、承知、承知。爰に恐しき相談一決して、得三は猶豫無く、お藤の帯に手を懸けぬ。娘は無

念さ、恥かしさ。あれ、と前褻引合して、蹠跟ながら遁げむとあせる、裳をお録が押ふれば、得三は帯際取つて屹と見え。高田は扇を颯と開き、骨の間から覗いて見る。知らせにつき道具廻る。

さても得右衛門は銀平を下枝の部屋に誘引つ、
「此室に寝さして置きました。と部屋の戸を曳開ければ、銀平の後に續きて、女房も入つて見れば、こはいかに下枝の寢床は藻脱の殻、主の姿は無かりけり。」「呀。」「おや。」「これは、と三人が呆れ果て、言葉も出でず。

銀平は驚きながら思ふやう、亭主は飽迄探偵と、我を信じて疑はねば、下枝を別の部屋に藏して、我を欺くべうも無し。之は必ず八藏が何とかして便を得て、前に奪ひ出だせるならむ。さすれば我は此家に用無し。長居は無益と何氣無く、「これは、怪しからん。不圖すると先刻遁失せた悪漢が小戾して、奪ひ取つたかも知れぬ、猶豫する處で無い。僕は直ぐに捜しに出るといはれて亭主は極惡げに、「飛んだことになりました、申譯がござい

ません。「なあに貴下の落度ぢや無い、僕が職務の脱心であつた。いや然らば。と言ひ棄て、とつかは外へ立出で、雪の下へと引返せば、とある小路の小暗き處に八藏は隠れ居つ、銀平の來懸るを、小手で招いて、「おい、此處だよ。」

お藤は得三の手籠にされて、遂には帯も解け廣がりぬ。こは悲しやと半狂亂、犇と人形に抱き附きて、「おつかさん！と血を絞る聲。世に無き母に救を呼びて、取り縋る手を得三がもぎ離して捻ぢ上ぐれば、お録は落散る腰帶を手繰つてお藤を縛り付け、座敷の眞中にずる／＼と、鬚掴んで引出し、押しつけぬ。形怪しき火取蟲いと大きやかなるが、今ほど此室に翔り來て、赫々たる洋燈の周圍を、飛び廻り、飛び狂ひ、火にあくがれて居たりしが、ぱつと羽たゝき火屋の中へ逆さまに飛び入りつ、煽動に消える火とゝもに身を焦してぞ失せにけり。

颯と照射入る月影に、お藤の顔は蒼うなり、人形の形は朦朧と、煙の如く仄見えつ。靈山に撞く寺の鐘、丑滿時を報げ來して、天地寂然として、室内

陰々たり。

斯りし時、何處ともなく聲ありて、「お待ち！
と一言呼ばり叫びぬ。

思ひ懸けねば、得三等、誰そやと見廻す座敷の中
に、我々と人形の外には人に肖たらむ者も無し。

三人奇異の思ひを爲すうち、誰が手を觸れしといふ
こと無きに人形の被すらりと脱け落ちて、上臈の
顔 顯はれぬ。 二呀と顔を見合す處に、いと物凄
き女の聲あり。 「無法を働く悪人等、天の御罰
を知らないか。 左様いふ婚姻は決してなりません。

幕の内なる泰助さへ、此聲を怪しみぬ。 前にも
既に説ふ如く、此人形は亡き母として姉妹が慕ひ齊
眉物なれば、宇宙の鬼神感動して、假に上臈の口を
藉りかゝる怪語を放つらむと覺えず全身粟生てり。
況して得三高田等は、驚き恐れ怪しみて、一人立ち、
二人立ち、次第に床の前へ進み、熟と人形を凝視つゝ
三人は少時茫然たり。

機こそ来たれ。と泰助が、幕を絞つて顯はれたり。名にし負ふ三日月の姿をちらと見せるとおもへば、早くもお藤を小脇に抱き、身を翻へして部屋を出でぬ。洵に分秒電火の働き、一散に下階へ駈下りて、先刻忍びし勝手口より、衝と門内に遁れ出づれば、米利堅種の巨犬一頭、泰助の姿を見て、凄まじく吠え出せり。

南無三、同時に轟然一發、頭を覗つて打出す短銃。

幸ひ狙ひは外れたれど泰助は稍狼狽して、内より門を開けむとすれば、蹶然たる足音門前に起りて、外よりも又内に入らむとするものありけり。

泰助蒼くなりて一足退れば、轟然たり、短銃の第二發。

いとも危ふく身を遁れて、泰助は振り返り、屹と高樓を見上ぐれば、得三、高田相並んで、窓より半身を乗出し、逆落しに狙ふ短銃の弾丸は續いて飛來らむ。爾時門の扉を開きて、つツと入るは銀平、八

藏、連立ちて今歸れるなり。

流石の泰助も度を失ひぬ。

短銃の第三發轟然。

十四 血の痕

鷹 探偵の銀平が出去りたる後、得右衛門は尚
不信晴れ遣らねば、室の内を見廻に、疊に附たる血
の痕あり。一箇處のみか二三箇處。此處彼處に
ばた／＼と溢れたるが、敷居を越して縁側より裏庭
の飛石に續き、石燈籠の邊には斷えて垣根の外に又
續けり。こは怪やと不氣味ながら、其血の痕を拾
ひ行くに、墓原を通りて竹藪を潛り、裏手の田圃の
畦道より、南を指して印されたり。

一旦助けむと思ひ込みたる婦人なれば、此儘にて
寐入らむは口惜し。この血の跡を慕ひ行かば其行
先を突留め得べきが、單身にては氣味悪しと、一ま
づ家に立歸りて、近隣の壯佼の究竟なるを四人ばか
り語らひぬ。

各々興ある事と勇み立ち、讀本でこそ見たれ、婦
人といへば土蜘蛛に縁あり。さしづめ我等は綱、
金時、得右衛門の頼光を中央にして、殿に貞光季
武、それ押出せと五人にて、棍棒、鎌など得物を携

へ、鉢巻しめて動揺めくは、田舎茶番と見えにけり。

女房は獨り機嫌悪く、由緒なき婦人を引入れて、蒲團は汚れ疊は臺無し、鶏卵の氷のと喰べさせて、一言の禮も聞かず。流れ渡つた洋犬でさへ骨一つでちん／＼お預はするものを。加之横須賀の探偵とかいふ人は、茶菓子が無錢でせしめて去んだ。と苦々しげに呟きて、あら寝たや、と夜着引被ぎ、亭主を見送りもせざりける。

得右衛門を始めとして四人の壯佼は、茶碗酒にて元氣を養ひ一杯機嫌で立出でつ。惜しや暗夜なら松明を、點して威勢は好からむなど、語り合ひつゝ畦傳ひ、血の痕を踏んで行く程に、雪の下に近づきぬ。金時眞先に二の足踏み、「得右衛門もう歸らうぜ。と聲の調子も變になり、進み兼ねて立止まれば、「是さお主は何うしたものだ。と言ひ勵す得右衛門。綱は上意を承り、「親方、大人氣無い、廢止にしませう。餘所なら可いが、雪の下はちと、なあ、おい。と見返れば貞光が、「左様だとも／＼、もう彼是十二時だらう。と

いふ後につき季武は、「今しがた靈山の子刻を打つた、此から先が妖物の夜世界よ。と一同に逡巡すれば、「え、弱蟲めら何のこれたか、幽霊だ。腰の無い物なら相撲を取ると人間の方が二本足だけ強身だぜ。と口にはいへど己さへ腰より下は震へけり。金時は頭を掉り、「なに鬼や土蜘蛛なら、糸瓜とも思はねえ。」「己もさ、狒々や巨蛇なら、片腕で退治で見せらあ。」「我だつて天狗の片翼を斬つて落すくらゐなら、朝飯前だ。」「此處にも狼の百足は立處に裂いて棄てる強者が控へて居ると、口から出任せ吹き立つるに、得右衛門はあてられて、「豪氣々々、其口で歩行いたら足よりは達者なものだ。さあ行かうかい。といへばどんじりの季武が、「處が、幽霊は大嫌否さ。」「辨慶も女は嫌否かつ。」「宮本無三四は雷に恐れて震へたといふ。」「遠山喜六といふ先生は、蛙を見たと立竦みになつたとしてある。」

「金時此に於てか幽霊が大禁物。」「綱も即ち幽霊には恐れる。といはれて得右衛門大きに弱り、此ま、歸らんは餘り腑甲斐無し、何卒して引張り行

かむ。はて好い工夫はおつとある。「何だ。
一所に交際つて呉れたら、翌日とは言はず歸り次第
藤澤（宿場女郎の居る處）を奢つて遣るが、と
言へば四人顔見合はせ、「なるほどたかの知れた
幽霊だ。「此中に人を殺したものは無いから、
まづ命に別條はあるまい。「むゝ、背負て呉れ
がちと怪しいが、「まゝよ行かうか、「おう。
「うむ。と色で纏まる壯佼等、よしこの都々逸
唱ひ連れ、赤城の裏手へ來たりしが、此處にて血の
痕途斷れたり。

得右衛門立停つて四邊を見廻し、「皆待つたり。
此家は何うやら、例の妖物屋敷らしいが、はてな。
して見るとあの婦人も化生のものであつたか知らん。
道理で來てから歸るまで變なことづくめ。しかし
幽霊でも己が一廉の世話をして遣つたから、空とは
思ふまい。何の故だかあの婦人は、心から可愛う
て不便でならぬ。今ぢや知己だから恐しいとも思
はぬ哩。おい、おらあ、一番表へ廻つて見て來る
から、一緒に來い。といへども一人として應ずる
者無し。「そんなら待つて居ろ、どれ、幽霊に

逢^あうて來^きましよ。 と得^{とく}右衛門^{もん}唯^{たゞ}一人^{ひとり}、板塀^{いたべい}を廻^{まは}つて見^みえずなりぬ。

四人^{にん}の壯佼^{わかも}は、後^{あと}に残^{のこ}りて、口^{くち}さへもよう利^きかれず。 早夜^{はやよ}は更^ふけて、夏^{なつ}とはいへど、風^{かぜ}冷^{ひや}々と身^みに染^しみて、戰慄^{ぞつ}と寒氣^{さむけ}のさすほどに、醉^{ゑひ}さへ醒^さめて茫然^{ぼうぜん}と金時^{きんとき}は破垣^{やれがき}に依懸^{よりかゝ}り、眠氣^{ねむけ}つきたる身體^{からだ}の重量^{おもみ}に、竹^{たけ}はめつきと折^をれたりけり。 そりやこそ出^でたぞ、と驚^{おどろ}き慌^{あわ}て、得^{とく}右衛門^{もん}も待^まち合^あへず、命^{いのち}から、
遁^{にげ}歸^{かへ}りぬ。

十五 火に入る蟲

短銃の筒口に濃き煙の立つと同時に泰助が魂消る
末期の絶叫、第三發は命中せり。

渠は立竦みになりてぶる／＼と震へたるが、鮮血
たら／＼と頬に流れつ、抱きたるお藤をニと投落し
て、屏風の如く倒れたり。

其と見て駈け寄る二人の悪僕、得三、高田、お録
もろとも急ぎ内より出で来りぬ。高田はお藤を抱
き上げて、「おほ、可哀相に嘸吃驚したらう、既
でのごとで悪漢が誘拐さうとした。もう好い哩、
泣くな／＼。と背搔撫で、勅れば、得三もほつと
呼吸、「あ、好かつた。何者だ、大膽な、人形
が聲を出したのに度膽を抜かれた處へ幕の後から飛
出しゃあがつて、眞個驚いたぜ。お録、早く内へ
連れて行きな。」「へい承りました。と高田の
手よりお藤を抱き取り肩に掛けて連れて行く。

「まづ、安心だ。うん八藏歸つたか、それ其死

骸の面を見いと、指圖に八藏心得て叢中より泰助を引摺り出し、「おや、此奴あ探偵だ。我を非道い目に逢はしやあがつた。「何、何うしたと、殺り損つて反對に當身を喰つた。其だから虚氣手を出すなと言はねえことか。や、銀平殿お前もお歸りか。「はい、旦那唯今。「うむ、御苦勞、何に下枝様は如何ぢや。「早速ながら下枝奴は知れましたか。と二人齊しく問懸くれば、銀平、八藏交代に、八橋樓にての始末を語り、「其でね、いざといふ段になつて部屋へ這入ると御本人様何處へ消えたか見えなくなりました。これは八藏殿が前へ廻つて連出したのかと思つた處が、喃八藏殿。「おゝさ、己も墓場の方で、銀平様の合圖を待つてましたが、別に嬢様の出て来る姿を見附けませんで、「もう／＼尋飽倦まして、夜も更けますし、旦那方の御智慧を借りようと存じまして一先づ歸りました。といふに得三頭を傾け稍久しく思慮居たるが、其にて思ひ當りたり。「して見ると下枝は又家内へ歸つて来たかも知れぬといふのは、今しがた誰も居ないのに聲が懸つて、人形が物を言ふていこたあ無い筈だと思つたが、下

枝の業であつたかも知れぬ哩。待て、一番家内を
檢べて見よう。其死骸はな、好く死んだことを見
極めて、家内の雜具部屋へ入れて置け。高田様、
貴下も御迷惑であらうが手傳つて下枝を捜して下さ
い。探偵は片附けて了つたト、此で下枝さへ見附
ければ、落着いてお藤が始末も附けます。と高田
を誘ひ内に入りぬ。

八藏は泰助に恨あれば、其頭蓋骨は碎かれけむ髪
の毛に黒血凝りつきて、頬より胸に鮮血迸り眼
を塞ぎ齒を切り、二目とは見られぬ様にて、死し居
れるにもかゝらず。尚先刻の腹癒に、滅茶々々
に撲り潰さむと、例の鐵棒を捻る時、銀平は耳を聳
て、
「待て！ 誰か門を叩くぜ。八藏は好く
も聞かず、
「日が暮れると人ツ子一人通らねえ此
邊だ。今時誰が来るもんか。といふうち門の戸
を丁、丁、丁、
「お頼み申す。といふ聲あり。

八藏は急いで鐵棒押隠し、
「いかさま、叩くわ。
「探偵の合棒でも來はしねえか。己あ見て來る、
死骸を早く、
「合點だ。と銀平は泰助の死骸を

運び去りつ。八藏は門の際に到り、「誰だね。」

「へい私。」 「へい私では解らないよ。夜々

中けたましい何の用だ。戸外にて、「え、

滑川の人ですが、お家へ婦人が入つて來はしません

かい。八藏は聞覚えある慥に得右衛門の聲なれば、

はてなと思ひ、「何な女だ。」 「中肉中背、凄

いほど美しい婦人。と聞いて八藏心可笑しく、

「其様な者は來ない、何ぞまた此家へ來たといふ次

第でもあるのか。」 「私どもの部屋から溢れて續

いてる血の痕が、お邸の裏手で止まつて居ります。

さては下枝は得三が推量通り、再び歸りしに相違

なからむ。其は其にて可いとして、少時なりとも

下枝を藏匿たる旅店の亭主、女の口より言ひ洩して

主人を始め我までの悪事を心得居らむも知れず。

遁がしは遣らじ、と矢庭に門の扉を開けて、無手と

得右衛門の手を捉へ、「婦人は居るから逢はして

くれる、さあ入れ。」 と引入れて、門の戸はたと鎖

しければ、得右衛門はおど／＼しながら、八藏を見

て吃驚仰天、「やあ此方は先刻の、「うむ、用

がある此方へ來いと、力任せに引立てられ、鬼に

捕らるゝ心地して、大聲上げて救ひを呼べど、四天
王の面々は此時既に遁げたれば、誰も助くる者無く
て、哀や擒となりけり。

十六 二 呀！

今は悪魔ばかりの舞臺となりぬ。磨ぎ清したる
三日月は、惜しや雲間に隠れ行き、縁の藤の紫は、
厄難未だ解けずして再び奈落に陥りつ、外より來れ
る得右衛門も鬼の手に捕られたり。さて彼の下枝
は如何ならむ。

さるほどに得三は高田ととも家内に入り、下枝
は居らずや見えざるかと、あらゆる部屋を漁り來て、
北の臺の座敷牢を念の爲め開き見れば、射込む洋燈
の光の下に白く蠢くものゝあるにぞ、近寄り見れば
果せるかな、下枝は此處にぞ發見されたる。

かばかり堅固なる圍の内よりそも如何にして脱け
出でけむ、尚人形の後より聲を發して無法なる婚姻
を禁めしも、汝なるか。と得三は下枝に責め問ひ、
疑を晴さむと思ふめれど、高田は頻に心急ぎて、
早くお藤の方をつけよ。夏とはいへど夜は更けた
り。さまで時刻後れては、枕に就くと鶏うたはむ、
一一刻の價千金と、只管式を急ぐになむ。さはと

うた

て下枝を引起して、足あらばこそ歩みも出め、斯して置くに如くことあらじ。人に物を思はせたる報酬は斯くぞと罵りて、下枝が細き小腕を後手に捻ぢ上げて、縛めんなしければ、下枝は絲より尚ほ細く、眼を見開きて恨しげに、「もう大抵に酷うしたが大好うござんせう。坐つて居る事も出来ぬやうに弱り果てた私の身體、何處へも参りは致しませぬといへば得三冷笑ひ、「其の手はくはぬわ。また出て失せうと思ひやあがつて、へむ、左様旨くはゆかないてや、ちつとの間の辛抱だ。後刻に来て一緒に寝てやる。ふむ、痛い様を見る。と下枝の手を見て、「おや、右の小指を何うかしたな、こいつは一節切つてあらあ。やい、何處へ行つて指切斷をして來たんだ。と問ひ懸るを高田は押し止め、「まあ、そんな事ア何時でも可いて。早く我の方を、「はて、せはしない今行きます。と出血 休まざる小指の血にて、我掌の汚れたるにぞ、かつぶと唾を吐き懸けて、下枝の袖にて押し拭ひ、高田と連立ち急がはしく、人形、室に赴きぬ。後より八藏入來り、斯う、いふ次第にて、八橋樓の亭主を捕へ、一室に押込め置きたるが、と

いふに得三頷きて、其働を譽めそやし、後に計らふべき事あり。其儘にして置きて、銀平と勝手に酒を飲んで寛げ。と八藏を去なして手を打鳴し、「録よ、お録。と呼び立つれど、老婆は更に答せねば、「はてな、お録といへば先刻から皆目姿を見せないが、はゝあ、疲れて何處かで眠つたものと見える。老年といふものはえゝ！ 埒の明かぬ。と呟きつゝ高田に向ひ、「どうせ横紙破りの祝言だ。媒妁も何も要つた物では無い。どれ、藤を進げますから。と例の被を取除くれば、此人形は左の手にて小褌を掻取り、右の手を上へ差伸べて被を支ふるものにして、上げたる手にて翻る、稜羅の袖の八口と、めたる錦の帯との間に、一人肩をすぼむれば這入らるべき透間あり。其處に居て壁を押せば、縦三尺幅四尺向うへ開く仕懸にて、總ての機械は人形に、隠るゝ仕方巧みにして、戸になる壁の繼目など、肉眼にては見分け難し。得三手燭にて此仕懸を見せ、「平常は鎖を下してお藤を入れて置くが、今晚は貴下に差上げるので、開けたまゝだ。此方へお入り。と先に立ちて行く後より、高田も入りて見るに、壁の彼方にも一室

あり。疊たぐみを敷しくこと三疊でふばかり。「いゝ一寸ちよんの間まだ。」と高田たかたがいへば、得三とく呵々からくと打笑うちうゑひて、
「東京とうきやうの待合まちあひにも此程これほどの仕懸しかけはあるまい。といひつゝ四邊あたりを見廻みまはすに、今いましがた泰助たいすけの手てより奪うばひ返かへしてお録ろくに此室こゝへ入れ置おくやう、命いのちけたりしお藤ふぢの姿すがた、又またもや消きえて見みえざりければ、
「**一**呀あなやとばかり顔色がんしよく 變へんじぬ。

高田たかたは太いたく不興ふきようして、「令嬢れいじやうは何どうしました。え、お藤ふじ様さんは何どうしたんです。とせきこむにぞ、得三とくは當惑たうわくの額ひたひを撫なで、「いやはや、お談話はなしになりません。藤ふぢが居ゐ無なくなりました。高田たかたは顔色かほいろ變かへ、「何なんだ、お藤ふぢが居ゐ無なくなつたと？」「此通このとほり、此室このしつより外ほかに入れて置おく處ところはない。實じつに不ふ思議しでなりません。と流石さすがの得三とくも呆あきれ果はてゝ、悄しをれ返かへれば高田たかたは勃然むっつとして、「左様さういふことのあるらう道理だうりは無ない。ふゝむ、こりや俄にわかに彼あの娘むすめが惜おしくなつたのだな。」「滅相めつそうな。」「否いや、其それに違ちがひありません。隠かくして置おいて、我われを欺あそむのだ。」「と思召おほしめすのも無理むりでは無ない。餘り變へんで自分じぶんで自分じぶんを疑うたふ位くらゐです。先刻さつきから見みえぬといひ、或ある

婆々奴が連れ出しはしないかと思ふばかりで、其より他に判断の附様がございませぬ。早速探し出しますで、今夜の處は何分にも御猶豫を願ひたい。と腰を屈め、揉手をして、只管頼めどいつかな肯かず、「なんのかのと、體の可いことを言ふが、婆々と馴れ合つてする仕事に極まつた。誰だと思ふ、えゝ、つがもねえ、濱で火吸器といふ高田駄平だ。そんな拙策を喰ふら者か。「まあ、さう一概におつしやらずに、別懇の間に免じて。「別懇も昨今もあるものか。可し我も斷つてお藤を呉れとは言はぬ。其代に貸した金千圓、元利揃へてたつた今貰はうかい。と證文 眼前に附着くれば、強情 我慢の得三も何とか返さむ言葉も無く困じ果てゝぞ居たりける。

十七 同士討

高田は尚も詰寄りて、「妖物屋敷に長居は無益だ。直ぐ歸るから早く渡せ。」そりや借りた金だ抵當のお藤が居無くなれば、屹度お返濟申すが、未だ家の財産も我が所有にはならず、千圓といふ大金、今といつては致し方がございません。何卒暫時の處を御勘辨。「うんや、ならねえ。此太平、言ひ出したからは、血を絞つても取らねば歸らぬ。きり／＼此處へ出しなさい。」と言ひ募るに得三は赫として、「こゝな、没分曉漢。無い者ア仕方が無え。と足を出せば、「踏む氣だな。可いわ。踏むならば踏んで見ろ。おゝそれながらと罷り出て、汝の悪事を訴へて、首にしてやるから覺悟しやあがれ。得三はぎよつとして、「何の、踏むなどゝいふ圖太い了簡を出すものか。と慌つる状に高田は附入り、「そんなら金を、さあ返濟せ。「今といつては何とも何うも。「ぢや訴へて首にしようか。「其は餘り御無體な。「えゝ！面倒だ。と立懸れば、「まあ、待つて呉れ。と袂を取るを、「乞食め、動くな。

と振離され、得三忽ち血相變り、高田の帶際無手と
掴みて、じり／＼と引戻し、人形の後の切抜戸を、
内よりはたと鎖しける。

何をかなしけむ。 壁厚ければ、内の物音外へは
漏れず。

良ありて戸を開き差出したる得三の顔は、眼据つ
て唇 わなゝき、四邊を屹と見廻して、「八藏、
八藏、と呼懸けたり。 八藏は入來りぬ。 得三は
聲を潜め、「八、一寸爰へ來い。」「へい、何、
何事でございます。 と人形の袖を潜つて密室の戸
口に到れば、得三は振返つて後を指し、「此を。
・・・・・八藏は覗き込みて反り返り、「ひやつ、
高田様が自殺をしたッ。 と叫ぶを、「叱！ 聲
高しと押し止めて、眼を見合はせ少時無言、此時一番
鶏の聲あり。

得三は片頬に物凄き笑を含みて、「八藏。 と
いふ顔を下より見上げて、「へい。」「お前に
も左様見えるかい。」「何、何、何が。」「い

やさ。高田の死骸は自殺と見えるか。「へい。自分で短刀の柄を握つて而して自分の喉を突いてれば誰が見ても全く自殺。」
「應、慥に左様みえるが、實は我が殺したのだ。」
「え、お殺なすつたか。」
「突然藤が居無くなつたぞ。八、先刻からお録は見懸けまいな。」
「へい、あの婆様は何處へ行つたか居りません。」
「左様だらう。彼奴もしたゝか者だ。お藤を誘拐して行つたに違ひ無い。あの娘はまだ小兒だ。何にも知らないから可し、老婆も、我等と一緒に働いた奴だ。人に惡事は饒舌まい。惜くも無し、心配も無いが、高田の業突張、大層怒つてな。お藤がなくなつたら即金で千圓返せ、返さなけりや、訴へると言ひ募つて、あの火吸器だもの、何というても肯くものか。既に駈出さうとしゃあがる。まゝよ毒喰はゞ皿迄と、我が突殺したのだ。」
「其は好うございまして。」
「すると奴さん苦しいものだから、拳で緊乎と此通り短刀の柄を握つたのよ。」
「體の可い自殺でございますね。」
「左様よ。其處で己が旨い事を案じついたて。」
「之からあの下枝を殺してさ。」
「下枝様を。」
「三年以来辛抱して、氣

永に靡くのを待つて居たが、あゝ強情では仕様が無え。今では憎さが百倍だ。虐殺にして腹癒して、而して下枝の傍に高田の死骸を僵して置く。の、左様すれば誰が目にも、高田が下枝を殺して、自殺をしたと見えるといふものだ。何と可い工夫であらうが。」

さりとは底の知れぬ悪黨なり。八藏は手を拍つて「旨い。と叫べり。」而して己が口の前で旨く世間を欺けば、他に親類は無し、赤城家の財産はころりと我が手へ轉がり込む。何と八藏さうなる日にはお前には一割は遣るよ。「えゝ有難い、夢になるな／＼。」もう是切り御苦勞は懸けないが、もう一番頼まれてくれ。「へい、何なりとも。」銀平は何うした。「頻に飲んで居ります。」彼奴も序に片附けて了ひ度い、家でやつては面倒だから、是から飲直すといつて連出してな。「へい／＼、なるほど。」何處かへ行つて酒を飲まして、ちよいと例の毒藥を飲ましやあ譯は無い、酔つて寝たやうになつて、翌日の朝は此世をおさらばだ。「承りました。」

併し今時青樓で起きて居ませうか。 「藤澤の女

郎屋は遠いから、長谷あたりの淫賣店へ行けば、何時でも起きて居らあ、一緒にお前も寝て来るが可い。

「ぢやあ直ぐと参ります。 「御苦労だな。

「なんの貴下。 と行懸くるを、 「待て、待て。

「え。 「宿屋の亭主とかは何したのだ。

「手足を縛つて猿轡を噛まして、雑具部屋へ入れと

きました。 「よし、よし。 仕事が済んだら検

べて見て大抵なら無事に歸して遣れ。 「へい左

様なら。 と八藏は勝手に歩いて銀平を見れば、

「八、やい、置去りにして何處へ行つて居た。 と

いふさへ今は巻舌にて、泥の如くに酔うたるを、飲

直さむとて連出しぬ。

十八 虐殺

得三は他に一口の短刀を取り出して、腰に帯び、下枝を殺さむと心を決めて、北の臺に赴き見れば、小手高う背に捻ぢて縛めて、柱に結へ附け置きたるまゝ、下枝は膝に額を埋め、身動きもせで居たりけり。

「約束通り寝に來た。と肩に手を懸け引起し、移ろひ果てたる花の色、惱める風情を打視め、

「何うだ、切ないか。永い年月好く辛抱をした。

「豪い者だ。感心な女だ。其性根にすつかり惚

れた。従順に抱かれて寝る氣は無いか。と嘲弄

されて切齒をなし、「えゝ汚らはしい、聞度うご

ざんせぬ。と頭を掉れば嘲笑ひ、「聞きたうな

うても聞かさにや置かぬ、最の爲だが、思ひ切つて

應といはないか。「嫌否ですよ。「左様か、淡々

としたものだ。そんなら此方へ來な。好い者を

見せて遣る。立て、えゝ立たないか。「あれ。

と下枝は引立られ、殺氣満ちたる得三の面色、之

は殺さるゝに極つたりと、屠所の羊のとぼ／＼と、

廊下傳ひに歩は一步、死地に近寄る哀れさよ。 蜉蝣の命、朝の露、そも果敢しといはゞ言へ、身に比べなば何かあらむ。

閻王の使者に追立てられ、歩むに長き廻廊も死に
行く身は最近く、人形室に引入れられて亡き母の
存生りし日を思ひ出し、下枝は涙さしぐみむ。 さ
はあれ業苦の浮世を遁れ、天堂に在す御傍へ行くと
思へば殺さるゝ生命はさら／＼惜からじと、下枝は
少しも悪怩れず。 爾時得三下枝をば、高田の傍に
押据えつ、いと見苦しき死様を指さしていひけるは、
「下枝見る、此顔色を。 殺されるのはなか／＼
一通りの苦しみぢや無いぜ、其もかう一思ひに殺れ
ばまだしもだが、いざお前を殺すといふ時には、此
迄の腹癒に、豫ても言ひ聞かした通り、 虐殺に
してやるのだ。 可いか、其でも可いか。 これと、
肩を押へてゆすぶれば、打戦くのみ答は無し。
「其から未だある。 此男と、お前と、情死をした
様にして死恥を曝すのだ。 何だ。 何だ。 下枝
は恨めしげに眼をニり、 「得三様、餘りでござい
ます。 「下枝様、貴嬢も餘り強情でございます。」

其が嫌否なら悉皆財産を我に渡して、而して三
様、貴下は可愛いねえ。》とかういへば可い。
其は出来無いだらう。矢張、斬られたり、突か
れたりする方が希望なのか、さあ何と。と言はるゝ
毎にひや／＼と身體に冷たき汗しつとり、斬刻まるゝ
よりつらからめ。猛獸犠牲を獲て直ぐには殺さず
暫時之を弄びて、早嫌いけむ得三は、下枝をはたと
蹴返せば、苦と仰様に僵れつゝ呼吸も絶ゆげに唸き
居たり。「やい、婦人、冥土の土産に聞かして遣
る。貴様の母親はな。顔も氣質も汝に肖て、矢
張私の言ふことを聞かなくなつたから、毒を飲まして得
三が殺したのだ。下枝は驚きに氣力を復して、打
震へて力無き膝立直して起き返り、「怪しき死様
遊ばしたが、そんなら得三、おのれがゝい。「應、
我だ。驚いたか。「えゝ憎らしい其咽喉へ喰附
いて遣りたいねえ。「へ、へ、唇へ喰附いて、接
吻ならば希望だが、咽喉へは眞平御免蒙る。どれ
手を下ろして料理うか。と立懸られて、「あれ
え、人殺し。と一生懸命、裳を亂して遁げ出づ
れば、縛の縄の端を踏止められて後居に倒れ、
「誰ぞ助けて、助けて。と泣聲囁らして叫び立つ

れば、得三は打笑ひ、「好くある奴だ。殺して
欲しいの死にたいのと、口癖にいうて居て、いざと
なると其通り。ても未練な婦人だな。「否、死
にたうない、死にたうない。親を殺した敵と知つ
ては、私や殺されるのは口惜い。と伏しつ轉びつ
身をあせりぬ。

得三は床柱を見て屈竟と打領き、矢庭に下枝を抱
き寄せ、「宛くな。ぢつとして居れ。と彼の
人形と押並べて、床柱へぐる／＼巻きに下枝の手
足を縛り付け、一足退つて突立ちたり。下枝は無
念さ遣る方なく、身體を悶えて泣き悲しむを寛々と
打見遣り、「今となつては汝の方から随ひます、
財産も渡しますと吐かしても許しはせぬ。と言ひ
放てば、下枝は顔に溢れ懸る黒髪を颯と振分け、眼
血走り、「得三様、何しても殺すのか。といふ
聲いとゞ、裏枯れたり。「うむ、虐殺にするのだ。
「あれえ。「何だ、未だびく／＼するか、往生
際の見苦しい奴だ。「そんなら何うでも助からぬ
か、末期の際に次三郎様にお目に懸つて、おのれの
悪事をお知らせ申し敵が討つて貰ひたい。と泣き

入る涙も盡き果て、血を絞らむばかりなり。「次
三もな我が命つけて、八藏が今朝毒殺した哩。

「え、あの方まで殺したのか。御方の失せさせ給

ひし上は、最早此世に望みは無し、と下枝は落膽氣

落ちして、「もう聞たう無い、言度ない。さあ

お殺し。と口にて衣紋を引合はせ、縛られたるまゝ

合掌して、従容として心中に観音の御名を念じける。

爾時得三は袖を掲げて、雪より白き下枝の胸を、

乳も顯はに押寛ぐれば、動悸烈しく胸騒立ちて腹は

浪打つ如くなり。全體蟲が氣に喰はぬ腸斷割つて

出してやる。と刀引抜き逆手に取りぬ。

夜は正に三更萬籟死して、天地は惡魔の獨有たり。

（次三郎とは 本間のこと、第一回より三回の
間に出で、毒を飲見たる病人なり。鎌倉より東京

のことなれば、敏き看官の眼も届くまじとて書添へ
置く。）

十九 二重の壁

得三一一度手を動かさば、萬事爰に休せむ哉。
下枝の命の終らむには、此物語も休みぬべし。さ
らば其に先立て、一旦滑川の旅店まで遁れ出でたる
下枝の、何とて再び家に歸りて屠り殺さるゝ次第と
なりけむ、其顛末を記し置くべし。

下枝は北の臺に幽囚せられてより、春秋幾つか行
きては歸れど、月も照さず花も訪ひ來ず、眼に見る
物は恐ろしき鐵の壁ばかりにて、日に新しうなるも
のは、苛責の品の替るのみ、苦痛いふべくもあらざ
れど、家に傳はる財産も、我身の操も固く守護て、
明しつ暮しつ長き年、月日は今日にいたるまで、待
てども助くる人無ければ、最早忍び兼ねて宵のほど、
壁に頭を打碎きて、自殺をせむと思ひ詰め、西向の
壁の中央へ、犇と額を觸れけるに、不思議や壁は縦
五尺、横三尺ばかり、裂けたらむが如く颯と開きて、
身には微傷も負はざりけり。

大名の住めりし邸なれば、壁と見せて忍び戸を拵

へ置き、其より間道への抜穴など、舊き建物にはあることなり。人形の後の小座敷も之と同じきものなるべし。

こは怪しやと思ひながら、開きたる壁の外を見るに、暗くてしかとは見分け難きが、壇階子めきたるものあり。静に蹈みて下り行くに足はやがて地に附きつ、暗さは愈々増りぬれど、土平らにて歩むに易し。西へ西へと志して爪探りに進み行けば、蝙蝠顔に飛び違ひ、清水の滴々膚を透して、物凄きこと言はむ方無し。とかうして道のほど、一町ばかり行きける時、遙に梟の目の如き洞穴の出口見えぬ。

此洞穴は比企ヶ谷の森の中にあり。さして目立つほどのものにあらねば、誰も這入つて見た者無し。

下枝は穴を這出で、始めて天日を拝したる、喜び譬へむものも無く、死なんとしたる氣を替へて、誰か慈悲ある人に縋りて、身の窮苦を歎き訴へ、扶助

を乞はむと思ひつる。そは夕暮のことにして、畦道より北の方、里ある方へぞ歩みたれ。

(得三が高樓にて女を見たるは此時なり。)

斯くて下枝は滑川の八橋樓の裏手より、泰助の座敷に入りたるが、浮世に馴れぬ女氣に人の邪正を謀りかね、うかとは口を利かれねば、黙して様子を見て居るうち、別室に伴なはれ、一人残され寢床に臥して、越方行末思ひ侘び、涙に暮れて居たりし折から、彼の八藏に見とがめられぬ。其のみならず妹 お藤を、今宵高田に娶すよし豫て得三に聞居たれば、こもまた心懸りなり、一度家に立返りて何卒お藤を救ひいだし、又こそ忍び出でなんと、忌しきふるす古巢に歸るとき、多くの人に怪しませて、赤城家に目を付けさせなば、何かに便よかるべしと小指一節喰ひ切つて、彼の血の痕を赤城家の裏口まで印し置きて、再び件の穴に入り冥途を歩みて壇階子に足踏懸くれれば月明し。何處よりか洩るゝと見れば、壁を二重に造りなして、外の壁と内の壁の間にかゝる踏壇を、仕懸けて穴へ導くにて透間より月の照射な

り。直ぐ眼の下は裏庭にて此時深き叢にイメ
る人ありければ、（是泰助なり。）浴衣の裳
を引裂きて、小指の血にて文字したゝめ、かゝる用
にもたゝむかとして道に拾ひし礫に包み、丁と投ぐれ
ば恰も可し。其人の目に觸れて、手に開かれしを
見て嬉しく、さてお藤をば奈何せむ。

此階子の中央より道は兩つに岐れたり。右に行
けば北の臺なる彼座敷牢に出づべきを、下枝は左の
方に行きぬ。見も知らざる廊下細くして最長し。
肩をすぼめて漸々歩み行くに、兩側は又壁なり。
理外の理さへありと聞く之は家の外の家ならむか。
十數年來住める身の、得三も之は知らざるなり。
廊下の終る處に開戸あり、開けて入れば自から音
なく閉ぢて彼方より顧みれば壁と見紛ふ許りなり。
此處ぞ彼人形の室の裏なる密室になんありける。

此時しも得三が、お藤を責めて婚姻を迫る折なり
しかば、如何せば救ひ得られむかと、思ひ悩み居た
るうち、火取蟲に洋燈消えて、此上無き機會を得た

るにぞ、怪しき聲音に驚かせしに、折よく外にも人
ありて妹を抱きて遁出でたれば、嬉しやお藤は助か
りぬ。我も早く出去らむと又もや廊下を傳はりて
穴に下りむと蹈迷ひ、運拙うして又舊の座敷牢に入
り終んぬ。かゝりしほどに身は疲れ、小指の疵の
痛苦劇しく、心ばかりは急れども、足蹠跟ひて腰起
たず、氣さへ漸次に遠くなりつ、前後も知らで居た
りけるを得三に見出されて、さてこそ斯は惡魔の手
に斬殺されむとするものなれ。

二十 赤城様

得三様

普門品、大悲の誓願を祈念して、下枝は氣息奄々と、無何有の里に入りつゝも、刀尋段々壊と唱ふる時、得三は白刃を取直し、電光 胸前に閃き來りぬ。此景此時、室外に聲あり。「アカギサン、トクザウサン。」

不意に驚き得三は今や下枝を突かむとしたる刀を控へて、耳傾くれば、「あかアぎさん、とくざうさん。」

得三は我耳を疑ふ如く、耳朶に手をあてゝ眉を顰めつ、傾聴すれば、慥に人聲、「赤城様 得三様。」

得三はぎよつとして、四邊を見廻し、人形の被を取つて、下枝にすつぱりと打被せ、己が所業を蔽ひ隠して、白刃に袂を打着せながら洋燈の心を暗うる、さそくの氣轉此で可しと、「誰だ。何誰ぢや。と呼懸くれば、答は無くて、「赤城様。」

得三様。しや忌々し何奴ぞと得三からりと部屋へやの戸開とあくれば、彼聲かのこゑ少し遠とほざかりて、また、「赤城あかぎ様、得三様。」え、誰だ。とつか、と外おもてに出れば、廊下らうかをばた／＼走る音おとして姿すがたは見えずに、
「赤得、赤得。背後うしろの方かたにて又別人またべつじんの聲、
「赤城様、得三様ニ呀と背後うしろを見返れば以前の聲が、
「赤得、赤得。と笑ふが如く泣くが如く恨むが如く嘲ける如く、様々の聲の調子てうしを變へんじて遠とほくより又近くより、透間すきまもあらせず呼立よびたてられ、得三は赤くなり、蒼あをくなり、行きつ戻りつ、うる、うる、うる。拍子ひやうしに懸かけて、「赤、赤、赤、赤。」
「何者だ。何奴だ。出合であへ出合であへ。といひながら、得三は血眼ちまなこにて人形にんぎやうしつ室へ駈かけ戻り、と見れば下枝しづえは被かぶせ置きたる儘寂まじせきとして聲こゑをも立てず。
「ちえ、面倒だ。と劍けんを掉ふるひ、胸前むなさき目懸めがけて突込みつっこみが、心急こゝろせきたる手許てもと狂くるひて、肩先かたさきぐざと突つき通とほせば、きやつと魂消たまぎる下枝しづえの聲。

途端とたんに烈はげしく戸とを打叩うちたきて、「赤得、赤得。
と叫さけび立たつれば、「汝野狐奴うめのぎつねめ、又また來たうせた。と得とく
三室外しつぐわいに躍出をどりいづれば、ぱつと遁出にげだす人影ひとかげあり。廊らう

下の暗闇に姿を隠して又
得三をぞ呼んだり
ける。

憎さも憎しと得三が、地踏鞆踏で縦横に刃を打掉
滅多打。聲は漸々遙になり、北の臺にて哀げに、

「あかあぎさん、とくざうさん。
寂然。
四邊は

此より以前得三が人形室を走り出で、聲する者
を追ひける時、室の外より得三と入違ひに、鳥の如
くに飛び込む者あり。突然下枝の被を外して之を
人形に被らせつ。其身は日蔽の影に潜みぬ。

されば得三が引返して来て、被の上より突込みた
るは、下枝にあらで人形なりけり。但下枝は右
にありて床柱に縛し上げられつ、人形は左にありて
床の間に据ゑられたる、肩は擦合ふばかりなれば、
白刃ものを刺したるとき、下枝は膽消え目も眩みて、
絶叫せしはさもありません。又もや聲に呼び出され
て、得三再び室の外へ駈け行きたる時、幕に潜める
彼男は黜の如く走り出で、手早く下枝の縄を解き、

抱き下して耳に口、「心配すな。と囁きたり。

時しも廊下を踏鳴して、得三の歸る様子に、彼男

少し慌てる色ありしが、人形を傍へずらして柱に寄

せ、被は取れて顔も形もあからさまなる、下枝を人

形の跡へ突立せ、「聲を立てる勿。と小聲に教

へて、己は大音に、「赤城様、得三様。」

ふかと思へば姿は亡し。既に幕の後へ飛込みたる

其早さ消ゆるに似たり。

彼も此も一瞬時、得三は眼血走り、髪逆立ちて

駈込みつ、猶豫ふ色無く柱に凭れる被を被りし人形

に、斬つけ突つけ、狂氣の如く、愉快、愉快。と

叫びける。同時に戸口へ顔を差出し、「赤城様、

得三様。「やあ、汝は！と得三が、物狂はしく

顧みれば、「光來、光來。此處まで光來と、小

手にて招くに、得三は腰に付けたる短銃を發射間も

焦燥しく、手に取つて投附くれば、ひらりとはずし

て遁出すを、遣らじものを。と此の度は洋燈を片

手に追懸けて、氣も上の空何やらむ足に躓き怪し飛

びて、火影に見ればこはいかに、お藤を連れて身を

隠せしと、思ひ詰めたる老婆お録、手足を八重十文

字に縛られつ、猿轡さへ嚙まされて、芋の如く轉が
りたり。

得三後居にニと坐し、「やい、此態は何うした
のだ。と口なる手拭退けて遣れば、お録はごほん
と咳き入りて、「はい、有難うございます。

「えゝ何うしたのだ。「はい、はい。もしお聞
きなされまし。あの時お藤様を人形の後へ隠して、
其から貴下、階下へ行りてがらくた部屋の前を通る
と、内でがさ／＼いたしますから、鼠が知らん、と
覗きますとね、何うでございませう。あの探偵泰
助奴がむく／＼と起き上る處でございました。

「え！」

幾度か水火の中に出入して、場數巧者の探偵吏、
 三日月と名に負ふ倉瀬泰助なれば、何とて脆くも得
 三の短銃に僵るべき。されば高樓より狙ひ撃たれ、
 外よりは悪僕二人が打揃ひて入り來しは、さすがの
 泰助も今迄に餘り經驗無き危急の場合、一度は狼狽
 したりしが、豫て携ふる繪具にて、手早く血汐を装
 ひて、第三發の放たれしを、避けつゝ故意と撃たれ
 し體にて叢に僵れしに、果せる哉惡人輩は誑死
 に欺かれぬ。

さりながら八藏が尚念の爲め鐵棒にて撲り潰さむ
 と犇くにぞ、爾時敵は二人なれば、蹴散らして一度
 退かむか、さしては再び忍び入るに甚便り惡け
 れば、太く心を痛めしが、恰も好し得右衛門が此折
 門を叩きしかば、難無く銀平に抱かれて、雜具部屋
 へ押込まれつ、後より得右衛門が擒にされて、同じ
 室へ入れられたるをも、泰助は好く知れるなり。

四邊靜になりしかば、潜かに頭を擡ぐる處を、老

婆お録に見咎められぬ。聲立てさせじと飛蒐りて、お録の咽喉をべめ上げ、老婆が呼吸も絶々に手を合して拝むを見濟まし、さらば生命を許さむあひだ、お藤を閉込め置く處へ、案内せよ、と前に立たせ、例の人形室に赴きて、其仕懸の巧みなるに舌を巻きて驚歎せり。斯くて彼の密室より、お藤を助け出しつゝ、かたの如く老婆を縛りて又雑具部屋へ引取りしを、知る者絶えて無かりけり。其より泰助は庭の空井戸の中にお藤を忍ばせ、再び雑具部屋へ引返して舊の如く死を粧ひ、身動きもせで居たりしかば、二三度八藏が見廻りしも全く死したる者と信じて、斯くとは思ひ懸けざりき。

とかうするうち、高田は殺され悪僕二人は酒を飲みに出 رفتれば、時分は好しと泰助は忍びやかに身支度するうち、二階にかいには下枝の悲鳴頻なり。驚破やと起つて行き見れば、此時しも得三が犠牲を手玉に取りて、活み殺しみなぶり居れる處なりし。

此に於て泰助も、と胸を吐きて途方に暮れぬ。

他の事ならず。得三は刀を手にし、短銃を腰にし
たり。我泰助は寸鐵も帶ず。相對して戦はゞ利
無きこと必定なり。とあつて捕吏を召集せむか、
下枝は風前の燈の、非道の刃にゆるぐ魂の緒、絶え
むは半時を越すべからず。よしや下枝を救ひ得ず
とも殺人犯の罪人を、見事我手に捕縛せば、我探偵
たる義務は完し。されども本間が死期の依頼を天
に誓ひし一諾あり、人情としては決して下枝を死な
すべからず。さりとして出て鬪はむか、我が身命は
立處に滅し、此大悪人の罪状を公になし難し。
憶公道人情 兩 是非。人情 公道 最
難爲。若 依公道 人情 缺。順了 人情
公道虧。如かず人情を棄て、公道に就き、眼前に
下枝が虐殺さるゝ深苦の様を傍觀せむ哉、と一度は
思ひ決めつ、我同僚の探偵吏に寸鐵を帶びずして能
く大功を奏するを、榮として誇りしが、今より後は
我を折りて、身に護身銃を帶すべしと、男泣に泣き
しとなん。

下枝が死を宣告され、仇敵の手には死なじとて、
歎き悶ゆる風情を見て、咄嗟に一の奇計を得たり。

走りて三たび雑具部屋に歸り、得右衛門の耳に囁きて、其計略を告げ、一臂の力を添へられむことを求めしかば、件の滑稽翁兼たり好事家、手足を舞はして奇絶妙と稱し、兩膚脱ぎて向ふ鉢巻、用意は好きぞやらかせと、齊く人形室の前に至れば、美婦人正に刑柱にあり、白刃乳の下に臨める刹那、幸にして天地は悪魔の所有に非ず。

得右衛門は得三の名を呼びて室外におびき出し、泰助は難無く室内に入りて潜むを得たり。然る後二人計略合期して泰助をして奇功を奏せしめたる、此處得右衛門大出来といふべし。被を被替へて虚兵を張り、人形を身代にして下枝を隠し、二度毒刃を外して三度目に、得三が親仁を追懸け出で、老婆に出逢ひ、一條の物語に少しく隙の取れたるにぞ、いで此時と泰助は、下枝を抱きて易々と庭口に立出づれば、得右衛門待受けて、彼はお藤を背に荷ひ、此は下枝を肩に懸けて、滑川にぞ引揚げける。

時正に東天紅。

暗號一發捕吏を整へ、倉瀬泰助疾駆して雪の下に
到り見れば、老婆録は得三が亂心の手に屠られて、
血に染みて死し居たり。更に進んで二階に上れば、
得三は自殺して、人形の前に伏し居たり。

旭の光輝に照らされたる、人形の瞳は玲瓏と人を
射て、右眼、得三の死體を見て瞑するが如く、左眼
泰助を迎へて謝するが如し。五體の玉は亂刃に碎
けず左の肩僅かに微傷の痕あり。

【完】